

京都方言の形態・文法・音韻(1)

—会話録音を資料として(1)—

Morphology, Syntax and Phonology of the *Kyoto* Dialect (1)

—A Descriptive Study Based on Conversational Corpus (1) —

中井 幸比古
Yukihiko NAKAI

目 次

目次	9
要旨	13
1. はじめに	38
1. 1 目的	38
1. 2 本稿で用いる会話録音資料について	38
2. 記述	40
2. 1 取り上げる項目・凡例	40
2. 2 音声・音韻、形態音素交替	43
2. 2. 1 1拍語の引き	43
2. 2. 1. 1 1拍名詞の引き	43
2. 2. 1. 2 1拍の動詞の引き	46
2. 2. 2 活用語末尾のル・スの形態音素交替	47
2. 2. 2. 1 動詞・動詞活用型の補助動詞と助動詞における、語末のルの交替	47
2. 2. 2. 2 助動詞ドス・デス、ノデス相当のノス、(補助)動詞オス・ゴザイマス、助動詞マスの、末尾のスの交替	48
2. 3 代名詞	49
2. 3. 1 自称の代名詞	49
2. 3. 2 対称の代名詞	50
2. 3. 2. 1 概要	50
2. 3. 2. 2 各語形の対称代名詞としての用法	51
2. 3. 2. 3 アンタの間投詞的な用法	53
2. 3. 3 こない・そない・あない・どない	54
2. 3. 4 そうや・そや	54
2. 3. 5 ナンショ・ナンシカ(何にせよ)と比較の格助詞	55
2. 4 「さん・はん・つあん」の使い分け	56
2. 5 「父・母・祖父・祖母・兄・姉・おじ・おば」の名称	58
2. 6 形容詞の音便形	60
2. 6. 1 先行研究	60
2. 6. 2 ウ音便の長短	60
2. 6. 3 アイ型の新形	61
2. 6. 4 シク活用の語形(シュー・シュ、シー・シ)について	61
2. 6. 5 音便形にニが後続する例	62
2. 6. 6 語彙	62
2. 6. 7 音便形の繰り返し	62
2. 6. 8 共通語的非音便形	63

2. 7	カッテ (モ)、ヤッテ (モ) 形	63
2. 7. 1	考察の範囲	63
2. 7. 2	形容詞+テモ、体言・形容動詞+ヤッテモ	63
2. 7. 3	カッテ・ヤッテ	64
2. 8	動詞のワ行五段活用のウ音便形	65
2. 9	動詞のサ行五段活用のイ音便形	66
2. 10	動詞の否定(ヘン・ヒン・ン)	66
2. 10. 1	ヘン系列の終止・連体形の語形	66
2. 10. 2	「～ていない」のヘン系列の語形	67
2. 10. 3	ン系列の終止連体形の語形	67
2. 10. 4	ン系統とヘン系統の使い分けについて	68
2. 10. 4. 1	ン系統しか使えない環境	68
2. 10. 4. 2	ヘン系列しか使えない環境	69
2. 10. 4. 3	「ないで・なくて」の意のントとンデ・イデについて	69
2. 10. 4. 4	ン系統とヘン系統の出現頻度	70
2. 10. 5	動詞の否定(ヘン・ヒン・ン) の活用形	71
2. 10. 6	丁寧否定形「動詞+シマセン・シマヘン」	72
2. 10. 6. 1	2種の丁寧否定形とその使い分け	72
2. 10. 6. 2	「動詞+シマセン・シマヘン」の語形	73
2. 10. 6. 3	「～ていません」の意の、「動詞テ形+シマセン・シマヘン」の語形	75
2. 10. 6. 4	2種の丁寧否定形の頻度	75
2. 10. 7	共通語的ナイ	76
2. 11	有生物主語の存在動詞(イル・イテル・オル) と、存在型アスペクト表現(テル・トル・タール)	76
2. 11. 1	先行研究	76
2. 11. 2	有生物主語で存在を示す本動詞の用法について	77
2. 11. 3	非丁寧形のテイル・テオル・テヨル・テル・トル	77
2. 11. 4	連用形+ヨル	78
2. 11. 5	無生物主語かつ自動詞+タール・ダール	78
2. 11. 6	語彙:「覚える」	78
2. 11. 7	「言うてた」などの音の崩れ	79
2. 12	～かける・～ておく	79
2. 13	可能表現	80
2. 13. 1	考察の範囲	80
2. 13. 2	五段動詞+レル・一段動詞+ラレルから可能動詞への語形変化	81
2. 13. 3	五段動詞+レル・五段動詞の可能動詞・一段動詞+ラレルの意味用法	82
2. 13. 4	「ヨー+動詞否定」の不可能表現	83
2. 14	待遇表現ハル	84
2. 14. 1	先行研究による語形の差異	84
2. 14. 2	会話資料に見られる語形	85
2. 14. 2. 1	語形の概要	85
2. 14. 2. 2	(b) 五段動詞以外に接続する場合の語形の詳細について	86
2. 14. 2. 3	(c) 否定形における、hの変化形(脱落及びj音化)について	87
2. 14. 3	ハルの継続・結果態	89
2. 14. 4	「ヤハル形」の発生経緯	89
2. 14. 5	ハルの命令形・オ～ハル・ヨ～ハラヘン	90
2. 15	待遇表現 オ+一段化など	90
2. 16	待遇表現 動詞連用形+ヤスの語形について	92
2. 16. 1	活用の概要とオ～ヤスの否定形	92
2. 16. 2	単独のヤス	94
2. 16. 2. 1	テヤス・デヤス	94
2. 16. 2. 2	トイヤス・ドイヤス	95

2. 16. 2. 3	テヤス・デヤス以外の単独のヤス	96
2. 16. 3	「テ・デ+補助動詞」のオ～ヤス形	96
2. 16. 4	～トクレヤハンカ	97
2. 16. 5	慣用表現「何(を)言うてとくれやす」	98
2. 17	その他の待遇表現(素材敬語)	99
2. 17. 1	待遇表現ナハル・ナサル	99
2. 17. 2	待遇表現レル・ラレル	100
2. 17. 3	待遇表現オ～ニナル	100
2. 17. 4	待遇表現テ・デミエル	101
2. 18	待遇表現の運用	102
2. 18. 1	素材敬語の運用—ハル・ヤス・ゼロを中心に—	102
2. 18. 1. 1	素材敬語の一覧	102
2. 18. 1. 2	ヤスとハルの使用状況	104
2. 18. 1. 2. 1	主語の分類	104
2. 18. 1. 2. 2	ヤスとハルの使用状況	105
2. 18. 1. 2. 3	ヤスの用法別・話者別使用状況	107
2. 18. 2	家族の会話における敬語運用—非丁寧形と丁寧形の使用状況、 聞き手主語における素材敬語使用	108
2. 18. 2. 1	先行研究と会話資料の概要	108
2. 18. 2. 2	家族間の会話における敬語運用—調査結果の一覧—	110
2. 18. 2. 3	家族間の会話におけるドス・デス・マス	112
2. 18. 2. 4	家族間の会話における、聞き手主語の素材敬語—命令以外—	112
2. 18. 2. 5	家族間の会話において、第三者主語における待遇度が高い素材敬語形式	113
2. 18. 2. 6	家族の会話における敬語運用—聞き手主語の場合の素材敬語使用—命令—	113
2. 18. 2. 7	家族間の会話における、対者敬語・素材敬語の使用のばらつきの理由	113
2. 18. 2. 8	親しい友人間の待遇表現	114
2. 18. 3	身内敬語—聞き手がソトの人の場合の、目上・ウチの人への素材敬語使用の有無—	115
2. 18. 3. 1	先行研究など	115
2. 18. 3. 2	用例の分析とまとめ	116
2. 19	助動詞マス・デス・ドス	119
2. 19. 1	ドスとデスの出現率	119
2. 19. 2	ドス・デス・マスの推量形	119
2. 19. 3	マスの意志形	119
2. 19. 4	マス+デス	120
2. 19. 5	丁寧否定過去のマセン+デシタ類と、マヘナンダ類	121
2. 19. 6	マスデゴザイマス	122
2. 19. 7	形容詞終止形+デス・ドス	122
2. 19. 8	コトスなど	122
2. 19. 9	ソースなど	123
2. 19. 10	マシタタデス→マシテス、マシタドス→マシトス ; オシタデス→オシテス、オシタドス→ オシトス	123
2. 19. 11	デヤス	123
2. 19. 12	ゴザイマス	124
2. 20	格助詞「～になる」の「に」	124
2. 21	方向・到着点・移動の目的の「に」「へ」「い」ゼロ	125
2. 21. 1	動詞「行く・来る」との結びつき	125
2. 21. 2	動詞「行く・来る」の到着点・方向の場合の「無助詞・助詞省略」の性格	127
2. 21. 3	「へ」がどのような意味で使われ、どのような動詞と結びつくか	127
2. 21. 4	イがどのような意味で使われ、どのような動詞と結びつくか	130
2. 21. 5	共通語との比較・変遷など	131
2. 21. 6	イの前後の母音の種類に制約があるか	132

2. 22	引用	132
2. 22. 1	引用の諸形式に関する先行研究	132
2. 22. 2	「と思う」	134
2. 22. 3	「と言う」	135
2. 22. 4	「と違う」	136
2. 22. 5	「ゼロ+思う・言う・違う」のアクセント	138
2. 23	理由を示す接続助詞(サカイ・ヨッテ・シなど)	139
2. 24	逆接確定条件を示す接続助詞(ケド・ケンドなど)	141
2. 25	接続助詞ト・バ・タラ・ナラ	142
2. 25. 1	概観	142
2. 25. 2	トについて	142
2. 25. 2. 1	分類	142
2. 25. 2. 2	(1)トの節の述語が動詞・形容詞の肯定形のもの	144
2. 25. 2. 3	(2)体言(形容動詞を含む) +ヤト・デスト	150
2. 25. 2. 4	(3)トの節の述語が否定形のもの	151
2. 25. 3	バについて	154
2. 25. 4	ナラについて	156
2. 25. 5	タラ・ダラについて	157
2. 25. 5. 1	タラ・ダラの語形と分類	157
2. 25. 5. 2	(1)タラ節の述語が動詞・形容詞の肯定形のもの	157
2. 25. 5. 3	(2)タラ節(句)が、体言+ヤのもの	162
2. 25. 5. 4	(3)タラ節の述語が否定形のもの	163
2. 25. 6	二重否定形式の義務・必要表現の比較—ンナラン類、ナアカン・ナイカン類、ントアカン・ントイカン類、ナカッタラアカン類—	165
2. 25. 7	ノヤッタラ類	167
2. 26	終助詞エ	168
2. 26. 1	エについて	168
2. 26. 2	マッセ・ドッセ・デッセ・オッセについて	169
2. 27	終助詞ワ	170
2. 27. 1	ワについて	170
2. 27. 2	丁寧の助動詞マス+終助詞ワ→マッサ	171
2. 28	「のだ・のです」に該当する表現	172
2. 28. 1	語形のまとめと変遷過程の推定	172
2. 28. 2	体言・形容動詞非過去形+ナンヤ・ナンデス・ナンドス	176
2. 28. 3	平叙文における、ノヤのヤの省略	177
2. 28. 4	疑問文における、ノヤのヤの省略	178
2. 28. 4. 1	カ後続の場合の、ノヤのヤの省略	178
2. 28. 4. 2	カを伴わない疑問文における、ノヤのヤの省略	178
2. 28. 5	疑問文におけるカの省略	179
2. 29	共通語の「な」「ね」に訳せない終助詞のナ	182
2. 30	ガナ・ヤンカ類・ヤナイカ類	183
2. 30. 1	概観	183
2. 30. 2	ヤンカ類の用法	184
2. 30. 3	ヤンカ類+間投助詞・終助詞	187
2. 30. 4	ガナ	188
2. 30. 5	ヤナイカ類	189
2. 30. 6	ヤンカ類・ガナ類・ヤナイカ類の用法の比較	190
2. 31	間投助詞のナ・ナーの音調	191
	引用文献	197
	『日本のことばシリーズ 26 京都府』(中井部分) 正誤	200

要 旨

明治半ばから大正前半生まれの話者を中心とする会話録音の文字化資料（約 38 万拍、kyodanwa と呼ぶ）に基づき、京都市方言の形態・文法・音韻の記述を行う。併せて、kyodanwa より下の世代の方言、明治以降の大阪市方言、「擬古方言」との相違などについても言及する。以下、章節ごとの要約を行う。配列はおよそ、以下の順である：音韻関係→体言→用言→補助動詞→助動詞→格助詞→接続助詞→終助詞→間投助詞。

2. 2 音声・音韻、形態音素交替

2. 2. 1 1拍語の引き

2. 2. 1. 1 1拍名詞の引き

和田(1980) (①～⑥)、奥村(1962) (⑦)・榎垣(1946) (⑧)の記述を検証し、また細密化をはかった。

①後ろに何も続かない場合：前に修飾語などが付き、文末に位置する場合の例がいくつかあるが、この場合、長い例と短い例がある。一般に単語を単独で発音する場合は引くのが普通だが、会話中にこの環境の例はない。

②付属語後続の場合：付属語の種類等によって引く度合いは様々。a <付属語の種類との関係>格助詞と副・係助詞の場合に引かない場合が多く、終助詞や助動詞の場合は引くことが多い。b <拍数との関係> 2拍以上の付属語のほうが1拍より引くことが多い。c <卓立との関係> 付属語を卓立させた場合は、引くことが多い。

③低接の助辞が付いた場合：和田の指摘どおり引く場合が多い。特に、「L0型+低接の助辞」は引く場合が多い。しかし引かない例もあり、引かないものは下の世代で増加中か。

④助辞なしに自立語に続く場合：動詞・形容詞を修飾する場合はすべて長い。それ以外の自立語に続く場合（間投詞・名詞）は、短い例もいくらかある。

⑤単語の使用頻度・場面：日常使用が稀な堅苦しい語は引きにくいと言われるが、これは会話録音から帰納困難。

⑥スタイルとの関係：共通語的・改まったスタイルでは引きにくいと言われ、或る程度 kyodanwa にも該当。

⑦アクセント型との関係：「下降型アクセント」の語は「上昇型アクセント」に比べて短く発音されることが多いとする説は、kyodanwa には当てはまらない。

⑧1拍語後続の助詞の引き：1拍語だけでなく、後続助辞も引くという説は、kyodanwa には当てはまらない。

2. 2. 1. 2 1拍の動詞の引き

1拍の動詞の引きは、1拍名詞と類似している。なお、連用中止・命令形の場合は必ず長い。連用命令・カ変の志向形は、長いものに加えて短いものもある。

2. 2. 2 活用語末尾のル・スの形態音素交替

2. 2. 2. 1 動詞・動詞活用型の補助動詞と助動詞における、語末のルの交替

①ル→ンへの交替は義務的ではないが、改まった会話を除き、ルのままよりンに変化する方が多い。但し、より下の世代では、「るのだ」相当の語形がンノヤ→ルンヤに変わっているため、ル→ンの交替は減少しているだろう。

②ル→ッへの交替は、榎垣(1946)は否定するが、実際には少数ながら現れる。

③連用形のリ→ンへの交替は、榎垣(1946)の記述と異なり、見られない。

2. 2. 2. 2 助動詞ドス・デス、ノデス相当のノス、(補助) 動詞オス・ゴザイマス、助動詞マスの、末尾のスの交替

当該語彙末尾のスは、後続音によって、以下のような交替形を持つ。いずれ交替は義務的ではない。

①ン*(初頭無声鼻音+通常の撥音) 鼻音始まりの付属語後続の場合

②ッ(通常の促音) サカイ・サケなどサ行で[s]始まる付属語後続の場合、ス→ッになる。
また後続が断定のヤの場合、スヤ→ッシヤになる。

③フ*(必ず無声のフ) カ・ケドなど、[k]で始まる付属語後続の場合

ン*のほうがフ*より出現数が多く、下の世代まで使われている。ン*は男女とも使うが、フ*は女性に偏る。ツについては、部分的だが2.19.2節、2.26.2節、2.27.2節を参照。

2.3 代名詞

2.3.1 自称の代名詞

やや改まった会話では、ワタシ・アタシが多い。そしてワタシは男性に多く、アタシは女性に多い。

くだけた会話では、男性はワシ・女性はアタシまたはアテ。アテは人により避ける。ワテは現れない。

場面による自称代名詞の切り換えは、男性に明瞭な人が多く、女性は同一語形アタシで通す人が多い。女性1人称のウチは1名の話者に現れるのみ。より下の世代の語。そのアクセントも、下の世代と異なり、「家・自分の家」の意と同じH1のみ。

2.3.2 対称の代名詞

2.3.2.1 概要

主要語形は以下のよう。①アンタ類（アンタ[最多]、アンタハン・アンサン[少ない]）がもっとも優勢。②オマエ、③オウチ、オタクもそれに次ぐ。但し、①のうちアンタは、聞き手の注意を引くための、間投詞的な用法、③オタク、オウチ、オタクサンは、「聞き手の家・聞き手の家族」の意味が多い。

2.3.2.2 各語形の対称代名詞としての用法

従来の報告のうちの多数派の記述以上のことはないが、結果を列挙する。

アンタ：目下(親→子・孫、兄→妹、先生→教え子、経営者→従業員・店員)、同輩(友人・親しい知人)に対して使われている。

アンタハン：同じ相手に対して、アンタハンとアンタの両方を使っている例も目立つが、明らかな目下(親→子、等等)への使用例がなく、アンタより待遇度が上。

アンサン：用例が少ないが、アンタハンに準ずる待遇度を持つ。

オマエ：発話者が全員男性。かつ目下へが多く、わずかに職場の仲間どうしを含む。アンタより待遇度が低い。

オウチ(多くの話者)・オタク(特定話者)：アンタハンに準ずる待遇度を持つよう。

2.3.2.3 アンタの間投詞的な用法

アンタの間投詞的な用法は、通常の対称詞用法の3倍もの用例がある。通常の対称詞では待遇度により様々の語形が現れたが、間投詞的な用法では、kyodanwa に関してはアンタに統一、待遇度が或る程度中和されるか。

2.3.3 こない・そない・あない・どない

[コソアド]ナイ([コソアド]はその任意の一文字)は、単独の副詞的な用法が殆どで、多くの話者に多数現れる。[コソアド]ニはごく少数。[コソアド]ナイナは皆無。榎垣(1946)は[コソアド]ナイの存在を否定するが、実態と異なる。ソナナ・ソナイ(ニ)は、初頭が無声鼻音のン*ナ・ン*ナイ(ニ)にも。特にモン・コト後続の場合に目立つ。

2.3.4 そうや・そや

「こうだ・そうだ・どうだ」は、コーヤ・ソーヤ・ドーヤに加えて、コヤ・ソヤ・ドヤが現れる。アーヤはあるが、×アヤはない。大阪に多いセヤは皆無。コヤ・ソヤ・ドヤのうち、ソヤは用例数が多い。そして、ソヤは、ソヤカテ・ソヤケド(モ)・ソヤサカイなどの接続詞的な用法に多い。なお、接続詞的ソヤケド・ソヤカラに限り、2名の下の世代の話者に少数のシヤ〜・シャー〜の形(新形か)が出るが、この2名もソヤケド・ソヤカラの方が多い。

ソーヤのアクセントはH1(高低低)とH2(高高低)が現れる。後者がソーH0+ヤ低接の規則的な音調で、前者は例外だが、前者は共通語的とも言えない。

2.3.5 ナンショ・ナンシカ(何にせよ)と比較の格助詞

共通語の「何しろ」にあたる語形は、ナンショがもっとも優勢である。ナンシカは皆無。この語形は、最近の京阪方言関係の書物に見られるが、少し前の方言辞典類・大阪落語にも現れないよう。比較の意の格助詞シカが関係するか。

2. 4 「さん・はん・つあん」の使い分け

サンは音環境に制約はないが、従来指摘の如く、ハン・ツァンは音環境に制約がある。以下の制約を検討した：「アエオ段で終わる語に付く時に限ってサンはハンになり得、イウ段および撥音で終わる語に付く時はハンにならず、サンのまま」。kyodanwa には、×ンハンの例はないが、i ハン・u ハンは若干用例がある：「お客はん・仲居はん」（話者は花街の仲居=1800年代末生）。或いは母音条件の崩れは花街から始まったか。しかし、もちろん、母音条件の崩れが最も甚しいのは、ハン衰退の後、擬古方言としてハンを使う場合だろう。

2. 5 「父・母・祖父・祖母・兄・姉・おじ・おば」の名称

名称・呼称・虚構的用法を一括すると、出現回数が多い語形は、父オトーサン・母オカーサン・祖父オジーサン・祖母オバーチャン・兄ニーサン・姉ネーサン・伯叔小父オッサン・伯叔小母オバサン。呼称の例がやや少ない。もっと呼称の例があれば、兄・姉はオの付いた形が優勢だったろう。全体に共通語に非常に近い。

チャンについて。指示対象からみると、チャン（サンより待遇度低）は女性に多い：オバーチャン、オカーチャンに多く、オジーチャン・オトーチャンの例は少ないか無い。発話者側からみても、女性がチャンを発話している例が多い。資料館録音の男性が非常に改まっていたことが原因かもしれないが、成人男性はチャン（子供っぽい、女性的）を避ける傾向があるか。

ハンについて。指示対象が女性の、オカハン・オカーハン・オバハンに見られるだけである。父親については、オトツァンはあるがオトーハンはない。オトーハンはあちこちで見かける語形ではあるが、少なくともその一部は、「ハン=京都弁・関西弁。促音=非京都弁的・関西弁的」という意識による擬古方言か。また、花街関係で話題になるネーハンは見れない。

2. 6 形容詞の音便形

2. 6. 1 先行研究（略）

2. 6. 2 ウ音便の長短

形容詞のウ音便は、2拍[終止連体形の拍数]では長い形のみで、3拍以上では長い形と短い形の両方が現れる。

3拍以上では、短い音便形は後続語によって現れる頻度がかかなり異なる。「①オス(短い形のみ) >②ナル(短いものが半数強) >③ゴザイマス(短いものが半数弱) >④一般動詞(長いものが短いものの2倍以上) >⑤形容詞・名詞、付属語のテ・テモ・マデ・デ(長いものだけ)」

これは、アクセントの単位数とも密接に関わる。「①オス(1単位のみ) >②ナル(1単位・サンディ形・2単位すべて出現) >③ゴザイマス(サンディ形多・2単位少) >④一般動詞(2単位多・サンディ形少) >⑤形容詞・名詞、付属語のテ・テモ・マデ・デ(2単位のみ)」

なお、「～ナイ」は用例不足なので、上の序列中に掲げることは控えた。また、ナルについては、ナールが1例だけある。形容詞音便が短くなった反動で、動詞部分が長くなったのだろう。

通時的には長い形から短い形に変化したわけだが、揺れのある部分—②ナル・③ゴザイマス・④一般動詞—について、kyodanwa の範囲では明確な世代差がない。

2. 6. 3 アイ型の新形

アイ型の新形であるナガ(長) やナガー(長) のタイプの例は1例もなかった。

2. 6. 4 シク活用の語形(シュー・シュ、シー・シ)について

シク活用の形容詞の音便は、シー・シが多い。拗音のシュー・シュの形は少なく、語例の大部分はヨロシュー、ヨロシュ、オヨロシューのみ。そして、それらは殆ど挨拶的な定型的な表現で使われている。シク活用以外のイイ活用はすべてイで、拗音ユの例はなかった。

文語・共通語のイイ活用のウ音便形は拗音だから、改まった場面や、短時間の質問調査では拗音が多めに現れる傾向がある。

2. 6. 5 音便形にニが後続する例

楳垣(1946)は、ク活用の形容詞に限って、音便形にニが後続しうとする。しかし、楳垣氏の挙例「カトーニ(堅く)なってしもた」のような例は kyodanwa にない。但し、共通語でも連用形+ニの形を取る「～の時点で」の意などに限れば少数の用例がある。ク活用・シク活用を問わず、音便形にニが続くのは、ごく限られた条件下のみ。

2. 6. 6 語彙

語彙。「非常に」の意味ではエローよりエライが圧倒的に優勢。キツーは例が少なく、あっても悪い意味の述語との組み合わせのみ。

2. 6. 7 音便形の繰り返し

形容詞を繰り返して強調することがしばしばあるが、音便形についても同様。音便形の長短はまちまちだが、両方長い例が多く、両方短い例、前が短く後ろが長い例もある。前が長く後ろが短い例はない。

2. 6. 8 共通語的非音便形

形容詞型の非音便形ク(ク・クテ・クテモ)は非常に少なく、特殊な用法を除けば、共通語の特徴が目立つ話者数名に限られる。

2. 7 カッテ(モ)、ヤッテ(モ)形

2. 7. 1 考察の範囲(略)

2. 7. 2 形容詞+テモ、体言・形容動詞+ヤッテモ

形容詞+テモについて。楳垣(1944)は、近畿方言で、ウ音便形+テモ(ナゴーテモ 長)よりも、カッテモ(ナガカッテモ 長)の形を多く使うとする。しかし、kyodanwa では、これに反しウ音便形+テモの形しかない。ウ音便の衰退に伴い、下の、或る世代で、カッテモの形が一時的に増加している可能性がある。下の世代の、否定の新形(へ)ンカッテモも、カッテモを増加させる一因か。体言・形容動詞+ヤッテモの形も、kyodanwa には現れない。体言・形容動詞+デモの形は多数現れる。

2. 7. 3 カッテ・ヤッテ

カッテ・ヤッテは、高木(2000)が指摘するのと同じ条件で見られる。この条件では、形容詞+カッテは形容詞ウ音便形+テと、体言・形容動詞+ヤッテは体言・形容動詞+デと、各々置き換えられる。そして、カッテ・ヤッテは少数で、ウ音便形+テ・デがはるかに多い。カッテ・ヤッテは、過去時制を特に明示したい場合に限られるか。

2. 8 動詞のワ行五段活用のウ音便形

「動詞のワ行五段活用は促音便ではなくウ音便となるが、ウ音便は長い場合と、短音化が起こる場合がある。短音化が起こるのは、終止形3拍語か、3拍語を後部要素とする複合動詞が原則。語彙的に、『食う』は2拍だが、クータに加えてクタもある」を、kyodanwa で検証した。終止形2拍語の短音化は「食う」に加えて、チュタ・チュテ(と言う)などにも見られる。終止形3拍はほぼ短い、長い形も若干現れる。但し、テ・デの後の補助動詞(「てもらう・てしまう」など)は、短い形のみ。3拍語のウ音便の短音化は、補助動詞から始まったか。

共通語的促音便形は非常に少なく、形容詞の非音便形が現れる話者(2.6.8節)とほぼ同じである。

2. 9 動詞のサ行五段活用のイ音便形

サ行五段動詞は、「サス(差す)」にのみイ音便形が現れ、他の動詞はすべてシの形のみ、とされる。kyodanwa もこれに矛盾しない。

2. 10 動詞の否定(ヘン・ヒン・ン)

2. 10. 1 ヘン系列の終止・連体形の語形

kyodanwa におけるヘン系列の終止連体形の語形について。

①五段動詞はア段+ヘンで統一。

②終止形3拍以上の一段動詞では、タベヤヘン・オキヤヘン・タバーヘン・オキーヒンは皆無で、タベヘン・オキヒンというヤなし・短い形に統一。上一段にヘンはなくすべてヒン。短い形は、楳垣(1946, 1948)は京都にないとしており、この結果と不一致。2.16.2節のように丁寧形「動詞+シマヘン」では、3拍以上にも長い形が出るので、

一応、榎垣氏報告は古形と考えられよう。

③終止形2拍の、五段以外の動詞について。2拍下一段は「出る」のみだが、デヤヘンは皆無でデーヘンのみ。2拍上一段・カ変・サ変は、①ミヤヘン・キヤヘン・シヤヘンと②ミーヒン・キーヒン・シーヒンの両方が現れる。サ変にはさらにセーヘンもある。話者の生年から、明らかに①ヤヘンが古く、②ーヒンが新しい。

以上の結果から、2拍について、ヤから長音への変化は、まずヤを一に変えるだけでよい下一段で起こり、その後、ヘン→ヒンの変化がからむ上一段・カ変・サ変に広がって行ったか。サ変については、シーヒンよりもセーヘンのほうが古そうなことも、この仮説を補強する。但し下一段の語例がやや少ない。

2. 10. 2 「～ていない」のヘン系列の語形

「～ていない」の語形はすべて、テヘン・デヘンで統一されている。ハルが接続する時にはハイッテハラヘン(入)に加えて、やや下の世代にハイッタハラヘンなどの形も現れるが(2.14.3節)、ハルを間に入れなければ、×ハイッタヘンは全く不可である。

2. 10. 3 ン系列の終止連体形の語形

ン系列の語形はほぼ安定している。なお榎垣氏報告のサ変セン→シン・カ変コン→キン为例がわずかに見られる。

2. 10. 4 ン系統とヘン系統の使い分けについて

2. 10. 4. 1 ン系統しか使えない環境

従来指摘されているように、ンしか使えない環境がある。しかし、「ンしか使えない」環境をkyodanwaから帰納することは難しいので、先行研究・内省も参照して、該当項目を列挙した(本文参照)。慣用的表現が多く、ン→ヘンの一般的変化に抵抗して古形を保存したものが多い。

2. 10. 4. 2 ヘン系列しか使えない環境

ヘンしか使えない環境は比較的少ないが、該当項目を列挙した(本文参照)。

2. 10. 4. 3 「ないで・なくて」の意のントとンデ・イデについて

下の世代の大阪方言を扱う高木(2000)の枠組を参照して、記述を行った。意味用法については本文を参照。

語形の面では、ントとンデ(イデ)は、ン系列の語形が優勢で、ヘン系列は殆どない。ントの他にヘントがあるが意味用法が異なり(事実に関する理由に限定)、アクセントも異なる。過去の×ナンダトの形はない。一方、ンデ・イデもン系列が非常に優勢だが、意味を変えることなくヘン系列も稀に現れる：ヘンデ、ヒンデ。但しヘン系列の形は結合度・文法化が異なる形式か。アクセントも両者は異なる。過去形のナンデに加えてヘナンデもある。

2. 10. 4. 4 ン系統とヘン系統の出現頻度

ンもヘンも使えると考えられる環境で、両者の頻度を見ると、ヘンのほうがンよりも多い。話者によりばらつきがあるが、概して下の世代ではンが一層減少している。また、ンの例には「ヘンに置き換えられなくもないが、ンのほうが普通」というものが目立つ。これらを除外すれば、一層ヘンが優勢となる。

2. 10. 5 動詞の否定(ヘン・ヒン・ン)の活用形

ヘン・ヒンとンの両方の系列を使う可能性があるものに限って、語形を一覧した(本文参照)。

否定過去の語形については、以下の変化が想定される。ナンダ・ンナンダ→ンダ→ンカット；ヘナンダ・ヘンナンダ→ヘンダ→ヘンカット。但し、右端の最新形はkyodanwaには殆ど現れない。

2. 10. 6 丁寧否定形「動詞+シマセン・シマヘン」

2. 10. 6. 1 2種の丁寧否定形とその使い分け

動詞の丁寧形の否定は、①連用形+マセン・マヘンと、②動詞+シマセン・シマヘンがある。②は非丁寧形ヘンの、丁寧形に相当する、但し、非丁寧形ヘンより語形・アクセントの両面で融合が遅れている。

①は殆どすべての動詞に使える。一方、②は非丁寧形でヘンが使える環境でのみ使える。また、原則として丁寧形しかない動詞(「存じます」など)は②は不可。

2. 10. 6. 2 「動詞+シマセン・シマヘン」の語形

動詞+シマヘン・シセヘンは、前に付く動詞の語形が複数あるが、その動詞の語形は、非丁寧形のヘン(2.10.1節)とほぼ同じである：

五段動詞はア段で統一(例：ヨマシマセン[読])。五段以外については、拍数と活用の種類の両方が関係する。2拍は語数が少なく、活用の種類と語形の関係が不明確だが、ヤとーの両方が現れる(例：ミヤシマセン・ミーシマセン[見])。非丁寧形のヘンの記述(2.10.1)に矛盾しない結果である。3拍以上は「なし」(オキシマセン[起])が殆どだが、わずかにー(オキーシマセン[起])が現れる。こちらは、非丁寧形ヘンはすべて「なし」で統一されていたの異なる。結合度の違いが原因か。

2. 10. 6. 3 「～ていません」の意の、「動詞テ形+シマセン・シマヘン」の語形

「～ていません」の意味の、「動詞テ形+シマセン・シマヘン」は用例が少ないが、ほぼテシマ[セヘ]ンの形。但し、4例だけ、シテヤシマ[セヘ]ン(サ変)が現れる。非丁寧形の場合はテヘンで完全に統一されていた(2.10.2節)のに対して、古形のヤが見られる。やはり結合度の違いによる。シテヤシマ[セヘ]ンの形はテヤ敬語と紛らわしいが、そうではないと考える。

2. 10. 6. 4 2種の丁寧否定形の頻度

①「動詞+シマセン・シマヘン」と②「連用形+マセン・マヘン」の両方使える環境における、両者の話者別出現率を見ると、②が多い話者は共通語的な話し方が目立つ。そして①が多い話者は女性に目立つ。下の世代では①は衰滅。ン→ヘンへの変化が進んだ後、それを追う形で、一時的に「連用形+マセン・マヘン」→「動詞+シマセン・シマヘン」の変化がかなり進んでいたのが、逆戻りしたということだろう。

2. 10. 7 共通語的ナイ

共通語的な、動詞型+ナイの例は殆ど現れない。

2. 11 有生物主語の存在動詞(イル・イテル・オル)と、存在型アスペクト表現(テル・トル・タール)

2. 11. 1 先行研究

既に、金水(2006)が中井(1999, 2001=kyodanwa のファイルの多くを含む)を明治以降の京都方言の資料として、記述を行っているので、本稿ではごく一部を扱った。

2. 11. 2 有生物主語で存在を示す本動詞の用法について

kyodanwa 検索では、マスなしのオルは殆ど現れないが、男性話者2名にだけ現れ、かつそのうち1名は、「蟹・亀」が主語で子供時代の思い出を語った部分。楳垣(1946)の、オルは「一般には使用せず、男特に男児の用語に見られる」とするのに一致。マス付きの謙譲・丁寧のオルは様々な話者に現れる。イテル(マス形も含めて)は殆ど現れない。

2. 11. 3 非丁寧形のテイル・テオル・テヨル・テル・トル

①非丁寧形のテオル・デオル、テイル・デイルは僅少。共通語的・改まりが目立つ話者のみ。丁寧形のテイマス・デイマスは例なし。但し、②丁重体のテオリマス・デオリマスはかなりある。

縮約形のテル・デル、トル・ドル・トール・ドールについて。①テル・デルは極めて多量に現れる。これが男女とももっとも普通の形。②トル・ドル・トール・ドールは、非丁寧形では圧倒的に男性が多い。そして、男性の場合、それほど明瞭なマイナス待遇ではない例も多いが、女性に見られるごく少数の例は、マイナス待遇的である。

③丁重体は、トリマス・ドリマス、トーリマス・ドーリマスが少数現れるが、非縮約形のテオリマス・デオリマスのほうが多い。④テヨル・デヨルは②に準ずる語形。

2. 11. 4 連用形+ヨル

連用形+オル、連用形+イル、連用形+アルの例はない。連用形+ヨルはかなりあるが、やはり男性に多い。

2. 11. 5 無生物主語かつ自動詞+タール・ダール

金水(2006)が指摘するように、中井(2001)の資料に「無生物主語かつ自動詞+タール・ダール」が結果状態の意味でいくつかみつかれる。語形面で、自動詞・他動詞のどちらに付く場合も、タール・ダールに加えて、タル・

ダルの語形がみられ、榎垣(1946)の記述と異なる。

2. 11. 6 語彙：「覚える」

「覚える」の意味用法が、現在の共通語から多少ずれていると思われる例①②がある。但し、いずれも用例は少ない：①「覚えまへん」(記憶にない)・「覚えます」(記憶にある) ②「覚えてから」(物心ついてから)。

2. 11. 7 「言うてた」などの音の崩れ

2例だけ、ユータラ(言うてたら[~あかん])と文字化した例がある。臨時の音の崩れのレベルかもしれないが、あり得る形。五段活用で、デ・ダとなるもの(ガ・ナ・マ・バ行)・促音便となるもの(タ・ラ行)を除き、テテ→ツテ、テタ→ツタとなることも、稀にありそうである。

2. 12 ~かける・~ておく

沖(1991・1996など)によれば、近畿方言と共通語とで、アスペクト形式「意志動詞+カケル」の意味用法がずれている。相違は2点。①依頼・命令・勧誘・意志の用法で、共通語では使えないが、近畿方言では使える。②共通語では、「瞬間動詞+カケル」は将現、「継続動詞+カケル」は始動・将現の両方の意味を持ち、継続動詞の始動は「本格的な動作・変化の手前に止まっている」。近畿方言でも同様だが、「始動」の場合、近畿方言では、共通語よりも、本格的な動作・変化に入っても使える場合がある。

このうち②は判定微妙で難しい。①はkyodanwaに用例がなく、偶然の可能性もあるが、新用法かもしれない。

「ておく」にも共通語と意味用法のずれがあるとされるが、この用例もない。こちらも新用法かもしれない。

2. 13 可能表現

2. 13. 1 考察の範囲 (略)

2. 13. 2 五段動詞+レル・一段動詞+ラレルから可能動詞への語形変化

一般に、(a)五段動詞+レル・一段カ変+ラレル→(b)五段からの可能動詞・一段カ変+ラレル→(c)五段からの可能動詞・一段カ変からの可能動詞[ら抜き言葉]の変化が、京阪方言で、(そして類似の変化が東京方言でも)起こっていることが知られている。

kyodanwa 検索では、(c)の一段カ変からの可能動詞[ら抜き言葉]は、まだ一例も現れない。ほぼ(b)の段階にあるが、否定形に限って、少数の五段動詞+レル((a)段階の語形)が現れる。

五段動詞について、可能表現の肯定形の可能動詞への変化が完了しているのに、可能表現の否定形は古形のレルが少数ながら残っている原因の一つは、否定形のほうが肯定形より使用頻度が高いことか。

2. 13. 3 五段動詞+レル・五段動詞の可能動詞・一段動詞+ラレルの意味用法

可能表現の意味用法について、渋谷(例えば1993、2006)の、可能であることの4条件の枠組みを使用して整理した：ア)心情可能、イ)能力可能、ウ)内的条件可能、エ)状況可能。イウエのいずれかに心情的なニュアンスが覆い被さった場合(金沢1998)、原則的にイ)ウ)エ)に所属させた。

肯定否定とも、状況可能の例が圧倒的に多く、内的条件・能力・明確な心情可能は用例数が少ない。これは一般的な傾向なのか、kyodanwaに回顧的な内容が多いからかどうかは不明である。

少数ながら現れる、五段動詞+レルの否定形は、成句的なものと、心情可能的なもの(金沢1998も参照)が目立つ。

2. 13. 4 「ヨ一+動詞否定」の不可能表現

「ヨ一+動詞否定」の不可能表現の用例はレル・ラレル・可能動詞に比べれば少ないが、現れる。渋谷(1993)が指摘するように、心情可能への偏りが見られ、主語は一人称が多い。しかし「心情可能以外・一人称以外」の例もある。これは金沢(1998)の大阪落語資料でも同様。

「動詞否定」部分について、ン系が優勢だが、ヘン系も現れる。ヘン系統は主に第三者について用いる(例えば和田1961)とされるが、一人称にも使われている。逆に、三人称についても、ヘンに加えてンも現れる。ヘンの進出の様々な段階を示すのだろう。

2. 14 待遇表現ハル

本節では、待遇表現ハルの語形について検討する。用法については2.18節。

2. 14. 1 先行研究による語形の差異

ハルの語形については種々変異があり、先行報告も様々。詳細は本文を参照。

2. 14. 2 会話資料に見られる語形

2. 14. 2. 1 語形の概要

(a) 五段動詞に接続する場合、動詞はア段で統一。先行諸報告に一致。語彙的に、「貰う・しまう」は、モラハル・シマハルが優勢（モラーハル・シマーハルも少数例あり）。(b) 五段動詞以外に接続する場合、ほぼヤハルまたはハルの両語形のいずれかである。拗音化（キャハルなど）は殆どみられない。(c) 否定形における h の変化形（脱落及び j 音化。例：ヨマーラヘン[読]・タバヤラヘン[食]）は、この世代でも現れる。

2. 14. 2. 2 (b) 五段動詞以外に接続する場合の語形の詳細について

五段動詞以外に接続する場合、話者によってヤハルとヤなしのハルの比率はまちまちだが、下の世代の話者はハルが多い。

2. 14. 2. 3 (c) 否定形における、h の変化形（脱落及び j 音化）について

否定形 ～ハラヘン、～ハラヘンダ・～ハラヘンナンダ・～ハラヘンナンダ；～ハラシマヘン（～ハラシマヘンナンダなどは偶々例なし）における、h の変化形（脱落及び j 音化）について。各話者の用例数が少ないので、個人差の実態がよくわからないが、上述のように、世代に関わらず、かなり多く現れる。

ハの変化形のうち、五段動詞のユワハラヘン→ユワーラヘンは単純な、h の脱落である。

五段動詞以外の諸語形については、以下のような成立過程が考えられる。

上一段・カ変・サ変 イヤハラヘン→h 脱落 ①イヤラヘン→②短音化イヤラヘン

イハラヘン → h 脱落（イアラヘン）→③イによる硬口蓋化 イヤラヘン

下一段 ネヤハラヘン→ h 脱落 ④ネヤラヘン→⑤短音化ネヤラヘン

ネハラヘン → h 脱落 ⑥ネアラヘン →⑦上一段等からの類推 ネヤラヘン

上記のうち、①⑥は先行報告にないようだが、kyodanwa に少数ながら現れる。④の例はないが存在が想定される形。これらは、臨時の音の崩れが、正規の語形に昇格する途上にあるのか。

なお、このヤラヘン・アラヘンの形は否定形のみ。肯定形の×イカール（行）・×イヤル（居）・×ネヤル（寝）などは存在しない。単純なハルの音訛。

2. 14. 3 ハルの継続・結果態

ハルの継続・結果態は、kyodanwa にはテハル・デハルとタハル・ダハルの両語形が現れる。例シテハル（為）、カツイデハル（担）；シタハル、カツイダハル。両語形の使用には明らかに世代差がある（平山編 1997 参照）。タ・ダハルは新しい。タ・ダハルを本格的に使う、もっとも生年が古い話者は 1912 生女性。テ・デハル→タ・ダハルの変化の原因は、五段動詞のア段+ハルからの類推と考える。なお、テヤハル・テイヤハルの例はない。

大阪でも、金沢(1998)が挙げる落語SPレコードの用例等はテハル・デハルばかり。より下の世代で、タハル・ダハルとア段+ハルの例があるというが、もしそうなら、動詞ア段+ハルとともに京都の影響か。

否定形は、テハラヘン・デハラヘンが多いものの、h の変化形も存在する：ターラヘン・ダーラヘン・テアラヘン。偶々デアアラヘンは例が見られない。これらは主に下の世代にみられる。cf. 2.14.2.3節。

2. 14. 4 「ヤハル形」の発生経緯

五段以外の動詞の、拗音化した「ヤハル形」（キャハル[来]・シャハル[為]・ヤハル[居]など）の発生経緯について。kyodanwa では、キャハル・シャハルとキハル・シハルが現れ、かつ後者が優勢であり、kyodanwa の下の世代でヤなしの形が多かった。そして、ヤハル形は例が殆どなかった。一方、ヤハル形は、より下の世代で種々

報告されている。

ヤハル形をヤハル→ハルの変化途上の語形と考えるには、ヤが脱落したハルがあまりに優勢。むしろ、五段動詞のア段+ハルと、新形の継続結果態タハル・ダハルの影響で、一旦ハルになった後、ハルの前の母音をアに統一しようとする動きの一環と考える。但しこの動きは徹底しておらず、下一段動詞や3拍以上の上一段動詞にはヤハル形は生まれていない。

2. 14. 5 ハルの命令形・オ～ハル・ヨー～ハラヘン

kyodanwa には命令形のハレは皆無。また、オ～ハルという語形を報告する文献があるが、kyodanwa にはない。一方、ヨー～ハラヘンという語形を否定する文献があるが、こちらは用例が存在する。

2. 15 待遇表現 オ+一段化など

オ+動詞連用形全体を一段化した待遇表現は、待遇度が低く、「だいたい目下」「家人が使用人に少し丁寧に言う時」「親が子に言う時等」に用いる(寺島 2006 など)。2人称主語で多く用いるが、3人称でも或る程度使う。オ+一段化は、2人称に偏っていることから、「素材敬語+対者敬語」の両方の要素を含んでいることになる。3人称の場合は、「目下」でなくても使う場合もあるよう。子への使用などについては 2. 18. 3 参照。

kyodanwa には、この形式の用例が少ない。これは、待遇度の低い形式であること、命令用法はやや下の世代まで使うが、命令以外の用法は上の世代でないと使わず、また、命令表現は場面設定の会話部分以外には殆ど現れないことが原因と考えられる。

2. 16 待遇表現 動詞連用形+ヤスの語形について

ヤスの語形を中心に検討する。用法の詳細は 2. 18 節。

2. 16. 1 活用の概要とオ～ヤスの否定形

ヤスの活用形のうち、命令形については種々議論があるが、否定形にも問題がある。オ付きの、オ+動詞連用形+ヤスで使う場合が多いので、その否定形について述べる。

オ～ヤスの、規則的な否定形は以下の諸形が考えられる[「～」部分は全て動詞連用形]：

- (a) オ～ヤサヘン (ヘン系) (b) オ～ヤサン (ン系)
(c) オ～ヤサシマセン、オ～ヤサシマヘン (ヘン系) (x) オ～ヤシマセン、オ～ヤシマヘン (ヘン系か)

このうち(x)が問題になる。これは、意味用法・待遇度の点からは、オ～ヤスの否定形と見なせる。しかし、肯定形の×オ～ヤシマスという形がないし、アクセントが2単位に分かれるが、その分かれ方が、オ～ヤ[低起式でヤの前の拍に核]+シマセン[H0]となっている。実は以下の諸語形の中で位置づけるべきものである。

- (x) オ～ヤ+シマセン・オ～ヤ+シマヘン 8例 (y) オ～ヤヘン なし
(x)' オ～+シマセン・オ～+シマヘン 4例 (y)' オ～ヘン・オ～ヒン 1例

これら(x)(x')(y)'は、待遇度・意味用法の点からは、オ～ヤスの否定相当だが、その起源は不明。形態的には、①オ+一段化(2. 15)のヘン系否定または、②オ～ヤスと、共通語にもある「オ+連用形+デス・ドス」の否定形との混交とも考えられるが、いずれも位相・待遇度が異なる。オシヤハンカの形につき 2. 16. 4 節を参照。

2. 16. 2 単独のヤス

2. 16. 2. 1 テヤス・デヤス

オを付けない単独のヤスは、kyodanwa では現れる環境が非常に限られる：即ち、テデの後、継続・結果態に限って、かなり多量に、様々な話者に現れる。単独のヤスのアクセント核の位置は、ヤスの前の拍(テデ)で統一。オ～ヤスは、諸活用形ともヤに核がある(オのせいで核が動いたものか)。このテヤス・デヤスの由来につき、榎垣(1955)は「…テ' オイ「ヤ' スとするが、私は単純にテにヤスが付いたもの」と考える。

2. 16. 2. 2 トイヤス・ドイヤス

ヤスの継続・結果態にはもう一つ、テ・デオイヤス由来の、ト・ドイヤスの形がある。元の形のテ・デオイヤスは kyodanwa には用例がなく、ト・ドイヤスのみ存在する。ト・ドイヤスはテ・デヤスより下の世代に多い。

単独のヤスは、辛うじて継続・結果態に残存していたが、それも廃れて、テ・デ+オ～ヤス由来のト・ドイヤスに統一されたと考えられる。なお、テ・デヤスとト・ドイヤスの間の待遇度の顕著な差は見られない。

2. 16. 2. 3 テヤス・デヤス以外の単独のヤス

テヤス・デヤス以外の単独のヤスは、kyodanwa には、わずかに1例あるが、これも言い間違い（本来オ～ヤスを意図した）の可能性がある。廃語的。私が実際に自然会話の中でこの用法を多く聞いたことがあるのは、1898年上京区生の女性だけ。この方は、オ～ヤスと単独のヤスを併用し、単独のヤスの待遇度は、オ～ヤスとそれほど違わなかった（cf. テヤス・デヤスの待遇度参照）。

2. 16. 3 「テ・デ+補助動詞」のオ～ヤス形

「動詞テ・デ+補助動詞」のオ～ヤス形は、原則として、補助動詞部分にオ～ヤスを付けて作るが、テオ・デオ部分が融合することがある。この融合は、①テオ・デオ→②トー・ドー→③ト・ドの3段階が考えられる。①のアクセントは2単位が原則。これに対して、②③は1単位でも2単位でもよい。①～③のどれをとるかは補助動詞の単語ごとの差異が著しい。オイキヤス（行）・オカエリヤス（帰）といった、通常の移動動詞には①が多いが、他は殆ど②③が優勢で、とくに③が多い（「居る」につき2.16.2参照）。

なお、補助動詞クレルについては、それをオクレヤスにするばかりでなく、前の本動詞もオ～ヤス形にすることがある。①オカキヤシテオクレヤス、②オカキヤシトククレヤス、③オカキヤシトククレヤス（実際は③が多い）。こちらのほうが待遇度が高い。クレル以外の補助動詞にはこの形はないようである。

「テ形+オクレヤス」に③が多いというのは、大阪でも同様。但し、大阪では「船場言葉」をのぞき、この語形は使用が少ない。「テ形+オクレヤス」の用法は、聞き手への命令形が多い。

なお、擬古方言文でよく使われる「テ形+オクレヤス」のネット上の語形を見ると、kyodanwa より著しく非融合形のテオクレヤスが多い。

2. 16. 4 ～トクレヤハンカ

1名の話者に、～トクレヤハンカ（～してくれないか=依頼）の例が見られる。待遇度はあまり高くない。この起源は2説考えられる。

①榎垣(1946)説。オシヤサンカ→オシヤハンカ。問題は、オシヤサヘン→×オシヤハヘン、オシヤサシマヘン→×オシヤハシマヘンなどではサ→ハの変化が起こっていないこと、また、オシヤハンカの形は命令専用であることである。この説を採るなら、サ→ハは、慣用表現として個別に起こった音訛。②*オシヤハランカ→オシヤハンカ説。榎垣(1946)にオ～ナハンカの例がある。これはオ～ナハランカ→オ～ナハンカだろう。これと並行的に考えれば、オ～ヤハンカは、*オシヤハランカ→オシヤハンカ。但し、*オシヤハルの形は2.14.5節で述べたようにkyodanwa に現れない。アクセント面からも、①②いずれも可能。

2. 16. 5 慣用表現「何（を）言うてとくれやす」

「そんなに心配・気遣いをしてくれる必要がない」「誉められて謙遜する」場面で、ナニ(オ)ユーテトクレヤスという用例が見られる。共通語直訳は「何を言っていて下さいます」だろうが、この形は共通語であまり使わないよう。Yahoo!検索でも用例ほぼ皆無。名古屋方言にやや類似する用例あり。方言における広がりを知りたい。

2. 17 その他の待遇表現（素材敬語）

2. 17. 1 待遇表現ナハル・ナサル

ナハルについては、榎垣(1946・1968)をはじめ、京都で使うとする文献もあるが、kyodanwa ではほとんど現れない。慣用表現的なものに限られる。本動詞としても使用例がない。要するに、ナハルはすでに廃語的である。

ナサルは、kyodanwa ではナハルより多い。待遇度は高い。元来の京都方言の、改まった場面で使う用法と、共通語的用法が重なって現れたものだろう。タテ形のみ一段活用形的な形も現れる。

2. 17. 2 待遇表現レル・ラレル、2. 17. 3 待遇表現オ～ニナル

共通語にもあるレル・ラレル・「お～になる」は、kyodanwa にも一定数現れる。前節の、ナサルが現れる話者

と重なりが見られる。

2. 17. 4 待遇表現テ・デミエル

(a) 共通語にもある「来る」の尊敬語の、本動詞としてのミエルは様々な話者に現れる。(b) 愛知県中心の「～ておられる」(尊敬・継続結果相の補助動詞)の意の「～テ・デミエル」が1名の話者にだけ現れるが、例外的で、滋賀県東部～名古屋方面と交流があった方か。(a)(b)の中間的な、「来る」の意味をある程度残した補助動詞の用法は、kyodanwa にはないが京都市でも使う人があるようで、江端(2008)が引く近世文献もこの用法。

2. 18 待遇表現の運用

待遇表現の運用を見るためには、ゼロ形式も含めた、すべての形式を包括的に扱わなければならないが、本稿では以下3点(2.18.1、2.18.2、2.18.3)に限定して述べる。

京都方言の待遇表現の運用については、辻(2004)の詳細な研究があるが、同論文はハルに焦点を当てており、どちらかという、くだけた場面を中心に扱っている。一方 kyodanwa は改まった会話の分量が多く、kyodanwa のほうが、生年がより上の会話話者を含む。そこで、本稿で改めて考察を行う。

2. 18. 1 素材敬語の運用—ハル・ヤス・ゼロを中心に—

素材敬語・素材兼対者敬語(謙譲語は除く。以下両者をまとめて「素材敬語」と呼ぶ)のうち、もっとも頻度が高いハルと、それに次ぐヤス(オ～ヤスが殆どだが、ごく少数現れるヤス単独形も含む)の運用を中心に扱う。素材敬語なしのゼロも対照のために部分的に扱う。

2. 18. 1. 1 素材敬語の一覧

話者を素材敬語使用の点から分類すると、以下の4つに分けられる。

①ハル・ヤス(+オ一段化)、②ハル・ヤス+種々の共通語にもある素材敬語(レル・ラレル、ナサル、オ～ニナル)、③ハルのみ、④ハル・ヤス以外の、共通語にもある素材敬語が主。

このうち、①②がもっとも優勢(②はやや改まりが多い会話)。従って、ハルとヤスがもっとも主要な素材敬語である。但し、用例数はハルがヤスの3倍以上存在する。③は極めてくだけた会話に多い(例えば兄・妹)。④は、共通語的かつ改まりが非常に大きい(ヤ・ドスよりデスが多い)。

2. 18. 1. 2 ヤスとハルの使用状況

2. 18. 1. 2. 1 主語の分類

主語を分類し、どのような主語の場合に、ヤス・ハルが使われるかを検討する。主語分類は辻(2004)を参照し、それに若干変更を加えた。具体的内容は本文参照。

2. 18. 1. 2. 2 ヤスとハルの使用状況

kyodanwa の検索結果から、以下のような事柄が明らかになった。

(1) 話し相手待遇で、「マトモの相手」が「家族」の場合、ハルのみならずヤスを使っている例がある。辻論文の会話資料では、ゼロが多く、妻が夫に対してハルを使うのみ。2.18.2節参照。

(2) 話し相手待遇で、「マトモの相手」が「親族」について、ハルはなくヤスのみ。但し、マトモの相手が未成年の場合はまた違ってくると思う。

(3) ヤスについて、以下のようにまとめられる。

(3a) 第三者待遇と話し相手待遇の比率は、命令形も含めれば、ほぼ1:1。命令形を除けば、2:1程度。ハルは第三者待遇と話し相手待遇の比率が27:1で、それに比べれば、はるかに話し相手待遇が多いが、第三者待遇もかなり現れる。2.18.1.2.3節参照。

(3b) ヤスの使用範囲はハルと重なる部分も多い。両者の使い分けについては、主語の範疇以外の要素—場面の改まり・聞き手など—を考慮に入れる必要がある。

(3c) ハル同様、ヤスは不特定の主語(一般論・範疇一般)についても使われる。

(3d) 第三者待遇で、ヤスを「家族」の「同・下」に関して使用した例はない。ハルはこの場合使われる。

- (3e) 第三者待遇で、ヤスが「親族」「親下」に使われている場合、主語は聞き手の関係者である場合が目立つ。
- (3f) 話し相手待遇では、ヤスは「マトモの相手」が「疎」の場合に広く使われる。ハルはこの場合使われていない。(辻論文の会話では、3f の該当例僅少)。
- (3g) 話し相手待遇では、ヤスは「マトモの相手」が「親下」「親族下」「家族下」の場合に、命令以外でも使われることがある。この環境ではハル・ゼロもともに現れる。2.18.2 節参照。

2. 18. 1. 2. 3 ヤスの用法別・話者別使用状況

ヤスは上述のように衰滅しつつある形式だが、森山(1994)によると、用法によって衰滅時期が異なり、「第三者待遇(1920-25 前後生以上)→話し相手待遇命令以外→命令(1940 前後生以上)」の順となるという。しかし kyodanwa の話者は上の世代が多く、この点ははっきりしない。

2. 18. 2 家族の会話における敬語運用—非丁寧形と丁寧形の使用状況、聞き手主語における素材敬語使用

2. 18. 2. 1 先行研究と会話資料の概要

辻(2004)は1910-1923 生女性話者の「カジュアル場面」の会話で、以下の2点を報告する。①カジュアルな会話において、少なくとも辻論文の会話の範囲では、非丁寧形が主流(姉・妹では非丁寧形のみ)。②家族及び親しい友人の間の会話における素材敬語・素材兼対者敬語(尊敬語・尊敬兼丁寧語)は、命令形をのぞき、ほぼ、ゼロとハルのみ。

ところが、同論文のアンケート調査結果や森山(1994)によると、家族が聞き手の場合、第三者待遇で主語が「非常に目上の人」に限ってはオ～ヤスを用いることがある。また、2.18.1.2.2 で述べたように、kyodanwa では、家族内でも、オ～ヤスが現れる例があった。以上から考えて、辻(2004)の会話録音資料の結果は、やや新しい形式である可能性がある。そこで、kyodanwa の家族間の会話10種と、『NHK全国方言資料』の京都市・大阪市を加え、計12種を扱う。但し家族関係のごく一部しか覆えていない。

2. 18. 2. 2 家族間の会話における敬語運用—調査結果の一覧—

会話ごとの敬語形式の、の使用状況を本文に一覧した。

2. 18. 2. 3 家族間の会話におけるドス・デス・マス

家族間の会話におけるドス・デス・マスなどの対者敬語形式(丁寧語)の使用から、以下(a)～(d)に分類できる。

(a) 改まった儀礼的な場面：母→娘の間でもヤは現れず、ドス・デス・ゴザイマスのみ。動詞+マスも多数。

(b) 上ほどではないがやや儀礼的な場面。会話によって異なるが優勢なものは以下のように：目下の嫁・妻にはヤはまったく現れずデス・ドス・ゴザイマスなどで統一されており、動詞+マスも多く現れるのに対して、目上の姑・夫はヤで統一されている。しかし、目上の姑・夫は丁寧体を全く使わないわけではなく、動詞+マスの例はいくつかある。

(c) くだけた場面のうち、親と未成年の子供の間の会話：ドス・デス・ゴザイマスは皆無で、母→娘ともヤで統一。マスもほとんど現れない。

(d) くだけた場面のうち、成人どうしの会話：会話によってまちまち。

2. 18. 2. 4 家族間の会話における、聞き手主語の素材敬語—命令以外—

家族間の会話における、聞き手主語の場合の、素材敬語形式の使用の有無、有の場合の語形について。

(a) 改まった儀礼的な場面：母→娘の間で、母→娘にヤスを使用。娘→母は該当例なし。目下へのヤスは不自然ではない。cf. 2.18.1.2.2 ヤスは家族外・話し相手待遇において、マトモの相手が「疎下・親下・親族下」の場合にも使われる。

(b) 上ほどではないがやや儀礼的な場面：妻→夫はすべてヤス。夫→妻の例なし。母→娘にハル。娘→母は例なし、など。

(c) くだけた場面のうち、親と未成年の子供の間の会話：

母→未成年の娘はゼロの会話と、オ一段化の会話がある。未成年娘→母の例はなし。オ一段化は、母→未成年

の娘に対してはデス・ドス・マスを使うことはないから（前節）、その代用・品位保持といった役割を果たしているか。

(d) くれた場面のうち、成人どうしの会話： 会話によってまちまち。

2. 18. 2. 5 家族間の会話において、第三者主語における待遇度が高い素材敬語形式

第三者主語（主語は様々）の場合、待遇度が高い素材敬語形式は少ないが、ヤスが或る程度現れる。使用者はいずれも、夫と話す妻・姑と話す嫁という下位者。

2. 18. 2. 6 家族の会話における敬語運用—聞き手主語の場合の素材敬語使用—命令—

オ～ヤシトクレヤス・動詞連用形+トクレヤスと、テクダサイは目下→目上に限られる。ヤス・テ命令は目下→目上にも目上→目下にも。オ+連用形・トクレヤハンカは目上→目下・同輩のみ。裸の連用形・命令形は現れない。

2. 18. 2. 7 家族間の会話における、対者敬語・素材敬語の使用のばらつき理由

家族間の会話における対者敬語・素材敬語の使用は、話者によって、かなりばらついているが、これには二つの要因が考えられる：①戦後の民主化によって、夫が上で妻が下、年上が目上で年下が目下、というような意識が消えたことと、②職業・社会階層などによる差。

②は大阪落語にも該当する：本格的調査が必要だが、長屋に住む庶民的な家と富裕な商家では、後者に敬語使用が多い。「役割語」的な可能性もあるが、或る程度は実際の言語使用を反映したものであろう。昔の商家では、使用人が常に同居していたわけで、家の中といっても身内だけの世界ではなかったことが、大きな原因ではないか。

kyodanwa や『NHK 全国方言資料』の一部に見られた、母→娘への素材敬語使用や、夫→妻の丁寧語使用なども、これに類するか。但し戦後は話者の個人的好み等によるところが大きい。

より下の世代では、家族間の上→下はもとより下→上でも、丁寧語や、聞き手主語の素材敬語使用が大幅に減少（辻2004）。家族のありかたが大きく変わった。

2. 18. 2. 8 親しい友人間の待遇表現

親しい友人どうしの会話で、2. 18. 1. 1 に示したように、1910 女中京と 1911 女中京の二人は女学校以来の友人だが、その会話では、デス・ドスとヤスが相半ばし、素材敬語もハルに加えてヤスが相当量現れている。これまた、家族間同様、辻(2004)の結果(2. 18. 2. 1) に比べると、待遇度の高い形式が多く使われている。

2. 18. 3 身内敬語—聞き手がソトの人の場合の、目上・ウチの人への素材敬語使用の有無—

2. 18. 3. 1 先行研究など

辻(2004)は、1910 年生女性の話者の会話は、“他人を話し相手として第三者待遇で、身内かつ上位の人物を話題にした場合の敬語運用はほぼ絶対敬語的運用になっている”(p. 125)としている。しかし、同論文の素材敬語はハルが殆どあり、このハルは下位の人物にも使われている。確かに、同論文の、より下の世代ではゼロが多くなり、何らかの素材敬語形式を用いることは注目に値するが、検討が必要。

既公刊資料の中で、『NHK 全国方言資料』の京都市では、1895 生女性（中京区の室町商家出身）が、夫・死んだ舅？が主語の文に、待遇度の高いレル・ラレルを使っている。その一つについて、加藤(1973)p. 40 は「東京人には言いまちがいなり無教養なためと思われるかもしれないが、方言としてこのようなきまりがあると見るべきである」とする。しかし、聞き手が親族かつ、主語が聞き手にとっても目上の可能性があり、絶対敬語・身内敬語の例か否か不明。一方、地域は違うが、同じ『NHK 全国方言資料』の大阪市船場言葉では、1888 生女性が、聞き手が主語より上の場合、身内敬語を使っていない。

従って、聞き手が主語よりも目上か目下か（そしておそらくウチかソトかも）が、尊敬語を使うかどうかに影響しているらしい。単純に「絶対敬語的運用」と決めつけることは難しい。

なお、「なくなる(亡)」は身内にも使われるが、共通語と同様「尊敬語ではなく美化語系」と考えるべきもの。

2. 18. 3. 2 用例の分析とまとめ

以下①～③に纏められる。このうち、①②は身内敬語的ではないことを示している。そしてこれは、共通語教育による新しい特徴ではなく、より古い時代から上方語の少なくとも一部にあった特徴に由来すると考える。

①「主語が話者より目上の家族・親族で、かつ、聞き手が家族・親族以外のソトの人」の場合の素材敬語

オ～ヤスやレル・ラレルなど、待遇度の高い素材敬語が使われている例は皆無で、ただ、ハルまたはゼロが使われているのみ。また、改まった儀礼的場面では、謙讓語が使われており、尊敬語は使われていない。ハルは或る程度くだけた場面のみ。

②「主語が話者の勤めていた店の主人・家族・あるいは店そのもので、かつ聞き手が、その店のソトの人」の場合。

比較的用例が少ないが、室町商家の例と、花街の揚屋の例がみられる。

前者は改まった儀礼的場面で、①の場面と同様、尊敬語を使うことはない。共通語と同様の敬語の運用。

花街の揚屋については、待遇度が高い尊敬語が現れる。近世的な、使用人と経営者の距離の大きさに加えて、たまたま聞き手が経営者と親しい人だったことが関係するか。

③聞き手がウチの人や近い人である場合、「主語が話者より目上の家族・親族」「主語が話者の勤めていた店の主人・家族・あるいは店そのもの」について、レル・ラレル、オ～ヤスなど高い待遇度をもつ尊敬語を使うことがある。これは現在の共通語（少し前の時代の共通語ならあったかもしれない）との違いと言えようか。

待遇表現は、言語体系の周辺に位置するもので、個人差が大きい。今後、可能な限り多くの資料にあたる必要がある。

2. 19 助動詞マス・デス・ドス

2. 19. 1 ドスとデスの出現率

個人差が大きいですが、上の世代では男女とも、ドス・デス併用の人が多い。そして、男性はデスがドスより多いが、デス専用の方は少ない（上の世代のデス専用者は1名の男性元教員）。女性は、ドスをデスより多用する人が多数派。kyodanwa では、ドス使用の下限は1934生女性。

2. 19. 2 ドス・デス・マスの推量形

ドスヤロ・ドッシャロ、デスヤロ・デッシャロ、マスヤロ・マッシャロと、共通語的なデショーがある。

ドッシャロ・デッシャロ・マッシャロのほうが、ドスヤロ・デスヤロ・マスヤロよりも優勢。共通語的デショーは比較的少ない。他に男性の共通語的に改まった物言いにも、推量のマショーが1例現れる。

2. 19. 3 マスの意志形

意志の「ましよう」の形はマヒョー・マヒョ・マホの形がある。kyodanwa 検索では、マヒョがもっとも多く、マヒョー・マショーが少数。マホは偶々現れない。但し意志形は会話の内容によっては出にくい。

2. 19. 4 マス+デス

共通語では、マセンデシタなどの形を除き、マスとデスを連続して用いる形は、現実の会話に現れても、誤用と認定される場合もある。一方、kyodanwa の京都方言では、広くマス+デスの形が現れる。これらの語形は京都方言で誤用の意識はなさそう。但し、肯定形（特に非過去のマスデス）は否定形より特定の話者に限られる。また、マスデスはあっても、?マスドスの用例はみられない。

2. 19. 5 丁寧否定過去のマセン+デシタ類と、マヘナダ類

否定過去は「マセン+デシタ類」とマヘナダ類がある。マヘナダ類には慣用表現が殆どないのに対して、「マセン類+デシタ類」はスンマヘンドシタのような慣用表現（活用形をいくつか欠き体言に近い）が目立つ。これは共通語にも類似の形がある。マヘナダ類→「マセン+デシタ類」の変化の、慣用表現はその先駆か。

2. 19. 6 マスデゴザイマス

マスデゴザイマスという形は4例現れる。何れも、場面設定の会話における、改まった挨拶の場面で、話し手自身の動作について使われている。

2. 19. 7 形容詞終止形+デス・ドス

形容詞終止形+ドスはわずか1例。ドスは形容詞終止形にほぼ付かない。形容詞はウ音便形+オスが原則。

一方、共通語的な形容詞終止形+デスの例は或る程度見られる。原則として、男性・共通語形を多く使う話者に目立つ。共通語(それほど古くない世代の)でも現れる、形容詞終止形+デス(スガッン*になる例も含む)、形容詞終止形+デショーに加えて、形容詞終止形+デシタ(ウ音便形+オシタから類推。かなり上の世代の使用)が若干例現れる。共通語的な、形容詞タ形+デスもいくつか現れる。

2. 19. 8 コットスなど

コト+ドスはコットスなどとなるが、kyodanwa には偶々現れなかった。

2. 19. 9 ソースなど

榎垣(1950)は「こうドスカ→こうスカ、どうドスカ→どうスカ」を掲載。kyodanwa 検索で見られるのは、ソース・ソーシヤロ(どうどっしやろ)・ナンス 3例(何どす)だけ。コース・ドースは偶然現れなかったのだろう。これらの形は男性話者の一部に多い。なお、ノドス→ノスにつき 2.28 節参照。他にモンス(モンドス)があるが、臨時の音の崩れのレベルか。

2. 19. 10 マシタデス→マシテス、マシタドス→マシトス; オシタデス→オシテス、オシタドス→オシトス

kyodanwa には例が少ない。該当例は3例のみ。他に、『NHK 全国方言資料』京都市に、オツカレヤシトスヤロ(←オツカレヤシタドスヤロ)などもあるが、kyodanwa には偶々現れなかった。

2. 19. 11 デヤス

1908 女松ヶ崎に1例「ああ そうでやすか」の形が現れる。デヤスは、大阪では古風ながら使われる(『上方語源辞典』)が、京都ではあまり聞かれない形である。古形残存か、地域差か、他方言の混入か。cf. 2.17.1 ナハル。

2. 19. 12 ゴザイマス

ゴザイマス(ゴザイマシタ・ゴザイマセン・ゴザイマヘン・ゴザイマシヤロなどを含む)は、共通語の用法とそれほど違わないようである。語形につき、古形のゴザリマスや、稀に聞かれるゴワスは、kyodanwa には現れない(実際 kyodanwa の中井録音の話者でこの語形を使う人はいないよう)。

感謝のアリガト(一)ゴザイマス・アリガト(一)ゴザイマシタ、種々の儀礼的な会話(種々の挨拶・謝罪など)で多く現れ、客に対する店員の会話にも目立つ。通常の改まった会話中に現れることは稀。友人との会話中のおどけの例が1例ある。語彙的に、ヨロシユ(一)ゴザイマス・ヨロシ(一)ゴザイマスと言い、×ヨーゴザイマスはない。

2. 20 格助詞「~になる」の「に」

「体言・形容動詞+になる」の「に」について。ニ・ン・ゼロの3形式が主要で、他にわずかにエが1名の話者に見られる。主要3形式については、ニが最多、ンがそれに次ぎ、ゼロはごく僅か。ゼロは、前の自立語ガンで終わっている場合が目立つ。ゼロは、この世代では正規の語形というよりは、臨時の音の崩れのレベルにとどまるものかもしれない。より下の世代では、くだけた会話でゼロが増加?

ニとンの使い分けの基準は明確ではないが、以下3環境ではニのみ(③は多少例外もありうる)。①ニの文節とナルの間に別の文節が挟まれている場合。②ニとナルの間に別の助詞が挟まれている場合。③尊敬語オ〜ニナル。

2. 21 方向・到着点・移動の目的の「に」「へ」「い」ゼロ

方向・到着点・移動の目的を意味する格助詞は、ニ・エ・イの3種があり、さらにゼロがそれに加わって複雑である。本稿ではこれを以下の6点から考察する。

2. 21. 1 動詞「行く・来る」との結びつき

用例数が多い「行く・来る」との結びつきについて、方向・到着点ではゼロ・エ・イが多く、ニはごくわずか。イとエについては、イのほうが概して生年が上の人に多い。より下の世代では、ニが増えている可能性がある。共通語でニが増えているからである。実際、高木(1999)の、近畿中央部の下の世代の会話資料を見ると、「行く」はほ

ぼゼロとニに限られるようである

一方、目的では、ニが圧倒的に多く、ゼロはごく少数。エは1例のみ。イの例はない。

無助詞は、「来る」より「行く」に多い。この理由は以下2点：「行く」が助詞イと同じ母音イで始まる；「来る」は到着点・方向の名詞とともに使われる率が「行く」より小さく、起点の名詞とともに使われることも多い。

2. 21. 2 動詞「行く・来る」の到着点・方向の場合の「無助詞・助詞省略」の性格

ゼロ形式には、音韻レベルからすでに助詞が存在しない場合(これのみを「無助詞」と呼ぶ)と、音韻レベルでは助詞が存在するが、表層の音声レベルで削除される、「エセ無助詞」がある。

エセ無助詞か本当の無助詞かは、アクセントから確定できることがある。京都方言においては、アクセントの面から、動詞「行く・来る」の到着点・方向の無助詞は、真の無助詞だと言える。中央式諸方言の地域差・世代差について実態を明らかにする必要がある。

2. 21. 3 「へ」がどのような意味で使われ、どのような動詞と結びつくか

近畿中央部の方言では、エ(イ)の意味が共通語よりやや広いとする記述もあるが、詳細不明だった。そこで、エ・イの動詞との結びつきを、渡辺(1983)・奥田(1983)の枠組に従って、用例を分類して提示した。本文参照。無助詞は扱わない。

エについて。kyodanwaのエは、渡辺(1983)・奥田(1983)の用法にほぼおさまった。そして、エの使用範囲は、やや古い共通語のエと、ほぼ同じであることが判明した。

2. 21. 4 イがどのような意味で使われ、どのような動詞と結びつくか

エと同じ枠組でイについて検討したところ、用例数が少ないため、いくらか欠ける用法もあるが、エとほぼ同一。

2. 21. 5 共通語との比較・変遷など

前2節で述べたように、エ・イの使用範囲は、渡辺(1983)の共通語の結果と大差はないものの、kyodanwaの結果は、私が日常見聞きする現代共通語よりエ・イが多いように感じる。そこで、「行く・来る」の場合に準じて、kyodanwaに見られる動詞をいくつか選んで、Yahoo!検索の結果と比較した。

「行く先・方向」の各動詞は、「行く・来る」同様、kyodanwaではエが優勢。yahoo!ではニが優勢。

「くつつき」の語例ではkyodanwaでもニがどちらかという優勢だが、yahoo!では圧倒的にニが優勢である。「譲り相手」「働きかけ」も同様である。

kyodanwaの京都方言の場合、イをエに加えると、Yahoo!検索に比べて一層ニが劣勢となる。

下の世代の共通語を扱った文献に、「くつつき」「譲り相手」のエを「?・不可」とするものがあるが、戦前の小説からの引用例が多い渡辺(1983)は、その用例をかなりあげている。

結局、共通語においては、エは衰退気味で、もっとも中心的な用法である「行く先・方向」でも頻度が小さくなり、それ以外の周辺的な用法では使われなくなっているということであろう。

kyodanwaの京都方言のエ・ニの用法は、明治～戦前の東京方言・共通語とそれほど大きく違わないのではないか。京都方言でも、下の世代では、共通語と同じくエが減少しているだろう(2. 21. 1節も参照)。

ゼロについては、「行く先・方向」に多く、それ以外は、ゼロもあるものの、その頻度が小さい。

2. 21. 6 イの前後の母音の種類に制約があるか

イの前の母音について。江戸語ではイはiの後という条件があったが、kyodanwa検索ではその制約はない。但し、kyodanwaでは、eの後は、形態素境界を越えてei→e:となるので、iは現れない。和田(1959)は兵庫県高砂市伊保町方言について、これと同じ現象を報告する。この環境では、助詞エとイの区別は消滅する。

イの後の母音について。和田(1959)は兵庫県高砂市伊保町方言について、助詞イは母音イの前で(必ず?)消えるとする。そして、イが消える例として、「行く」「入れる」「いぬ(往)」をあげる。kyodanwa検索では「いぬ」は該当例が偶々ないので、「行く」「入れる」のみを検討する。すでに2. 21. 3節で述べたように、ゼロだけではなく、イ・エ・ニのすべてが現れる。京都方言においては「後にイで始まる語が来るから助詞イが消える」とは言えない。む

しろ、個々の語による違いのほうが大きい。

2. 2.2 引用

2. 2.2. 1 引用の諸形式に関する先行研究

金沢(1996)・前田(1977)などによると、大阪では、幕末以降、「と言う」は「ト→チュー→ゼロ」の変化が進行し、それに遅れて「と思う」が「ト→ゼロ」の変化を起こした。但し、改まった場面などではずっとトが存在した。一方、和田(1959)・朝日(2008)によれば、兵庫県播磨地方の「老年層」では、「と言う」についてはゼロが優勢。最近の若年層では各地でゼロが減少し、共通語的「ッテ」が優勢になっている(朝日2008、岸江1992など)。また、和田(1959)によれば「言うて」が助詞ト・テに近い役割を果たすこともある。時期不明だが、「と違う」のトの省略も起こっている。京都方言に関する詳細な情報はないが、先行研究から、ゼロは存在するが大阪・兵庫より少なそう。

さらに、先行研究で言及されない場合が多いが、「て言う」が現れる。これは大阪落語.txtの状況などから考えて、「ゼロ言う」より一層新しい可能性があり、地域によってはあまり使わないのかもしれない。

2. 2.2. 2 「と思う」

kyodanwaでは「と思う」がきわめて優勢で、ゼロは少ない。話者によってゼロはまったく現れない。概して下のほうの世代でゼロが多くなっているため、ゼロ形の普及は新しい。但し、kyodanwaではゼロの比率は「言う」とほぼ同じで、「言う」の変化が先行しているわけではない。「言う」と異なり、「て思う」という形は殆どない。

kyodanwaより下の世代では、「って思う」の形が増えているよう。共通語の「って」は京阪方言のテと異なり、「思う」にも付くことの影響。なお、京阪のテは体言を修飾できないが、ッテは修飾できる。このッテの連体修飾の形も、kyodanwaより下の世代にはある。

2. 2.2. 3 「と言う」

(a) 語形について。トユー・チュー・ゼロユー・テユー・ッテユーの5形式が現れる。もっとも優勢なのはチュー。トユー→ゼロユーの変化において、京都方言は、兵庫県播磨方言などよりも古形を保つ。下の世代ではゼロユーがやや増える。さらに下の世代ではテユーが増加(共通語の干渉か。但し上の世代でもテはある程度使われていて、ゼロとの新古は不明)。共通語形ッテユーはまだ殆ど現れない。トユーは共通語的改まりによるものが現れるのみ。

(b) 意味用法との関係について。①「特定の人物による、既発話の一回・複数回・習慣的発話、話者が未来に発話しようとする言葉の、引用(直接引用+間接引用)」と、②それ以外のすべての用法(概して文文化が進んだもの)に分けると、「ゼロ言う」は①が多い。「て言う」「ちゅう」は②が多いが一定数①も現れる。「と言う」「って言う」はほとんど②。「と言う→ゼロ言う」の変化で、「ゼロ言う」は①の用法で使われ始めたが、②にまで十分広がる前に、他の形式に座を譲り渡しつつある、ということだろう。改まり度が高い「と言う」や非常に共通語的な「って言う」が②の意味に多いというのは、朝日(2008)の結果とも矛盾しない。

「言う」の二重使用について。これは、「ユーテ・テユーテ・チューテ」が「助詞ト」なみになり、後ろに動詞「言う」が来るというものである。間に別の語句が挟まれる事もある。①の用法が圧倒的に多いこと、チューテもあるが、ユーテが多いことが特徴的である。

2. 2.2. 4 「と違う」

「違う」の語形について、近畿中央部の方言において、「違う(チガウ)」は、チャウ・チャウになることがあるが、kyodanwaでは、チガウが圧倒的に多い。チャウ・チャウが新形であること・くだけた場面で現れるからだろう。

「違う」の意味を、(a)否定・(b)推定[疑問文の形で推定を示す]・(c)独立して用い、「そうではない・否」の意、(d)それ以外の用法(もともとの動詞の意味を持つもの)の4つに分けると、kyodanwaに少数現れるチャウ・チャウは、(a)(b)(c)の三つの用法に限られる。一方、より下の世代の人が多いYahoo!検索では(d)の用法のチャウ・チャウも多量に見つかる。意味の拡張が起こっているのだろう。

「～じゃない」(a否定またはb推定)の意味の「～と違う」における、トの省略について。トなしは、チガウよりもチャウ・チャウに多い。また、用法の面では、トなしは「b推定」の場合に多い。

なお、「違う」の前には、体言に加えて「用言+ノ」が現れる。「トなし」の場合、そのノはンになることがあるが、それは前が過去(タ形)の場合に限られる。非過去(ル形)の場合はノのみ。但しヨリ下の世代は異なる。cf. 2. 28. 1.

2. 2. 2. 5 「ゼロ+思う・言う・違う」のアクセント

助詞ゼロの場合、「思う・言う」と「違う」はアクセントが異なる。「思う・言う」は低接しかつ高起式の音調を持つのが原則。「違う」は通常の高起式の音調である。

「思う・言う」の前のトは低接するから、「思う・言う」は音韻レベルではトがあり、音声レベルで省略されたエセ無助詞。(チューも低接かつ高起式の音調を持つ)。一方、「違う」の前のトは順接なので、エセ無助詞なのか真の無助詞なのか不明。

2. 2. 3 理由を示す接続助詞(サカイ・ヨッテ・シなど)

①サカイ系がもっとも優勢。頻度は、サカイ>サカイニ>ハカイ>ハカイニの順。ここで、ニの有無の条件は未詳だが、サカイ(ニ)とハカイ(ニ)の使い分けは以下のよう：(A)サカイ(ニ)は殆ど話者が使うが、ハカイ(ニ)は一部の話者のみを使う。(B)サカイ(ニ)専用か、サカイ(ニ)・ハカイ(ニ)併用のいずれかであって、ハカイ(ニ)専用の人はいない。(C)両者は出現する音環境が異なる：サカイ(ニ)はあらゆる音環境で現れるが、ハカイ(ニ)は、原則として、「(1)その直前のアクセント単位中に大幅な下降があり、かつ(2)その直前の母音がアの場合」にのみ現れる。2条件のうち(2)の母音条件が強力。

ai→eに変化した語形は少数の話者のみ：サケ・ハケ・サケニ。

②ヨッテ系は少なく、ごく少数ヨッテ、ヨッテニが現れる。

③カラは、通常理由を表す用法では共通語的発話にごく少数現れる。また、明確な原因理由を示さない、テ(デ)カラ・テ(デ)カラニ(否定ではントカラ・ントカラニ)の形が少数現れる。

④ノデはカラと異なり、改まった場面を中心に、幅広い話者に一定数現れる。なお、ノデについては、明確な理由を表す場合とそうでない場合の境界が不明確なことがある。

⑤シは、幅広い話者に現れる。意味用法は共通語のシの用法とあまり変わらないよう。「サカイ系=共通語のカラ相当、シ=共通語のシ相当」と見てよいよう。大阪方言で報告される、終助詞化したシの例はない。

⑥デは京都府では丹波から北が中心で、京都市では老年層の一部が人によって使う程度だが、kyodanwaには少数現れる。但し、否定形に続くものが多く、否定形以外は2名の話者に4例現れるのみ。

2. 2. 4 逆接確定条件を示す接続助詞(ケド・ケンドなど)

kyodanwa 検索で、ケド・ケドモが優勢だが、僅かにケンドもある。共通語的ケレド・ケレドモもいくらか現れる。

2. 2. 5 接続助詞ト・バ・タラ・ナラ

2. 2. 5. 1 概観

条件を示すト・バ・タラ・ナラについて。kyodanwa では、バ・ナラ(訛音形を含む)は、既に極めて僅かである。バは慣用表現を中心に少数例。ナラは4例のみ(接続詞を除く)。タラがもっとも多く(用例数1101)、トがそれに次いで多い(用例数567)。近世末以降の、近畿中央部の方言におけるタラへの統一はよく知られるところだが(金沢1998; 矢島2006など一連の研究)、この世代の京都方言では、トもタラの半数以上見られる点が注目される。矢島(2006)の「昭和期録音の京阪方言の談話」では、トはバ・ト・タラ・ナラ全体の3割に満たない。

バ・ト・タラ・ナラの用法は多岐に亘り、意味用法の分類が非常にややこしいが、前田(1991)のリアリティーによる分類をもとに、豊田(1978以下)・矢島(2006以下)などによって若干変更を加えた。前田(1991)の分類枠における、トとタラの用例数を表に本文に掲げた。

その表で、ト・タラの用法を、共通語のそれと比較してみると、⑤⑥一般条件・反復習慣条件(番号は表中のもの)に、トとともにタラが多いこと、⑦~⑫の一回限りの事実を示す用法にトが存在するものの用例が少ないことが、もっとも顕著な相違点である。⑩発見のトがかなり多いのは、本稿の分類基準が、前田(1991)より広いからだろう。

2. 25. 2 トについて

2. 25. 2. 1 分類

トの節の述語形式によって以下のように三分類し、各々を前節で述べた意味用法の枠組みによって検討した。(1) トの節の述語が動詞・形容詞(用言)の肯定形のもの、(2) トの節(句)が、体言(形容動詞を含む)＋ヤのもの、(3) トの節の述語が否定形のもの

2. 25. 2. 2 (1)トの節の述語が動詞・形容詞の肯定形のもの

タラは「のだ」に付く例がかなりあるが(「ノヤッタラ、ニヤッタラ；タンヤッタラ」。2. 25. 7 節参照)、トの場合「ノヤト、ニヤト；タンヤト」の例はなかった。

用例がある項について検討する。

②条件的用法・仮定的の反事実－反事実・③条件的用法・仮定的の未実現－未実現については、用例は少ないが、まだ存在する。もっとも、「未実現－未実現」の例は、道案内の用例をはじめ「事実」に近いものも多い。下の世代ではタラへの集中が一層進んでいるだろう。

⑤⑥非仮定的・多回の一般(恒久)・反復・習慣について。一般条件の例が多いものの(矢島 2006 など)、必ずしもそれだけではなく個人の過去の回想の例などもある。

⑦～⑫の「非仮定的」「一回」「様々な状況」を表す例は比較的少ない。あっても、一回だけとも一般論とも、どちらとも取れる例も多い

⑭評価の用法は、数は多くないが存在する。矢島(2008)では、大阪落語SP(本稿の大阪落語.txtとは異なる資料)・京阪方言会話録音資料(『NHK 全国方言資料』を除き本稿のものとは異なる資料。京都は分量僅か)に、この用法のトはないとするが、kyodanwa には存在する。分量の違いが原因か。なお、大阪落語.txt には用例が見られない。後述(2. 25. 6)の、二重否定形式の義務・必要の慣用句も、トを含むものは、矢島(2007)の資料にないという。京都より大阪でトは早く廃れたか。

⑯後置詞的用法 「観点(後置詞)」「提題」とも用例が見られる。

⑰接続詞的用法 接続詞的な物は数多い。但し完全に一語化していて、接続助詞のトとは縁を切ったものも含む。

2. 25. 2. 3 (2)体言(形容動詞を含む)＋ヤト・デスト

「体言＋ヤト」は後件のリアリティーのみによって、「動詞・形容詞＋ト」に準じた分類を行う。多くの例は、⑯提題またはそれに準ずるものとして扱うべきものかもしれない。

語形面で、非丁寧形の「体言＋ヤト」はあっても、丁寧形の「体言＋ドスト」の用例は欠けている。「体言＋デスト」は少数現れるが、共通語的改まりか。「体言＋ゴザイマスト」の用例はなかったが、(共通語的)改まりの場面ならあり得る形である。(cf. ドシタラ、デシタラ、ゴザイマシタラはすべてあり得る)。

なお、動詞については、動詞部分に非丁寧形のほうが多いものの、丁寧形の「動詞＋マスト」形が(共通語的ではない発話にも)現れる。

用法としては⑤⑥がほとんどで、2. 25. 2. 2 「述語が動詞・形容詞の肯定形」の場合と同じ。他に⑭評価が1例現れる。

「体言＋ヤト・デスト」の形は、大阪落語.txt には現れない。用例の多くを占める過去の回想(後述)が少ないからか。それともやはり大阪のほうがトの衰退が早かったか(前節⑭評価の項も参照)。

2. 25. 2. 4 (3)トの節の述語が否定形のもの

以下(a)～(c)の3形式がある。

(a) 動詞＋ヘント。ヘントは僅少で、大部分はント。ヘントは事実またはそれに準ずるものに限られるよう。

(b) 動詞＋ント 帰結を肯定と否定(二重否定)とに分けると、(b1)帰結が肯定の用例は僅少。(b2)二重否定の例はかなりあり、以下のように4分類される：(b21)二重否定形式の、義務・必要の慣用句がもっとも多い。次節及び2. 25. 6 節を参照。(b22)帰結が省略されているもの。(b23)二重否定で、帰結は状況可能の否定・不許可の例(義務

必要を含意するとも言える)。 (b24) 二重否定で、慣用句ではないが義務・必要を含意するもの。

(c) 体言など+ヤナイト。比較的用例が少ない。

2. 25. 3 バについて

バについては共通語と同形のイケバ・デレバ・アカケレバ (行・出・赤) に加えて、イキヤ・デリヤ・アカケリヤの形が、楳垣(1946)などに報告されているが、後者は kyodanwa には皆無に近い。共通語と同形のもの少数かつ共通語的。但し、⑬並列・列挙の少数例は京都方言的なものかもしれない。

否定形イカナ・デナ (行・出) は、帰結部も否定形をとる二重否定が原則 (矢島 2007)。しかし、kyodanwa には帰結が肯定のものも少数ある。もっとも、帰結が「悪い」、「危ない」、「嘘え」などで、いずれもマイナス評価の語で、義務・必要を含意。

二重否定形式のものは、義務・必要の慣用句が多いが、状況可能の否定・不許可、慣用句ではないが義務・必要を含意するものなどもある。

関連語形のナケナ (無ければ) が 1 例だけ現れる。『近世上方語辞典』 p. 835 にはナケネバを載せるので、その音訛だろう。ナケリヤ・ナケラ (←ナケレバ) という規則的な形とは異なる。

2. 25. 4 ナラについて

ナラは殆ど現れない。接続詞的な「それなら」の意味でホンナラ、ン*ナ、ホナはかなりの量現れるが、これらのナラは、もはや単語の一部になってしまっており、袂を分かっている。語源意識も薄い。また、サイナラ・サヨナラのような挨拶表現も現れるが、これも縁が切れている。現代共通語のナラの用法の一部は、京都方言ではノヤツタラ・ニヤツタラで示される。2. 25. 7 節を参照。

2. 25. 5 タラ・ダラについて

2. 25. 5. 1 タラ・ダラの語形と分類

タラ・ダラは、時に、音が崩れてター・タ・ダー・ダのようになるが、正規の語形と意識するかどうかは個人差があるよう。その意識の違いが、文字化に影響を与えるだろう。タラと縁を切った接続詞のホタ (そしたら) などは多量に現れる。トと同様、タラ節 (ダラも含む、以下同様) の述語形式によって三分類し、各々を 2. 25. 1 節の枠組の中で、検討した。

2. 25. 5. 2 (1) タラ節の述語が動詞・形容詞の肯定形のもの

タラ節の述語が動詞・形容詞の肯定形の場合は、先の前田(1991)の枠組みによる一覧表の殆どすべての項に用例が見られる。用例が明らかに存在しないのは、①事実的な反事実条件文・⑬並列・列挙だけである。先にも触れたが、共通語と異なり、⑤⑥一般条件・反復習慣条件にかなりの用例が見られる。むしろ、分類枠の中で、⑤⑥の用例が最も多い。⑤⑥の用法はとも多いが、タラもそれとほぼ同数の用例がある。

2. 25. 5. 3 (2) タラ節 (句) が、体言+ヤのもの

体言+タラは、⑮提題として扱うべきものが多いようだが、体言+ヤトの場合に準じて、それ以外の項目に割り振ってみた。語形は大部分体言+ヤツタラである。ドンタラ・デンタラも少数現れるが、挨拶など儀礼的場面に多い。デゴザイマシタラは偶々ない。他に共通語的な体言+デアツタラが 1 例ある。(なお、丁寧形は、動詞+マシタラの例も 28 例とわずか。

2. 25. 5. 4 (3) タラ節の述語が否定形のもの

タラ節の述語によって (a) (b) に分ける。

(a) 動詞の否定形 動詞+ナンダラ、動詞+ヘナンダラ、動詞+ヘナンダラ、動詞+ヘンカッタラの諸語形が見られるが、動詞+ナンダラがもっとも優勢。動詞+ント (2. 25. 2. 4 節) は、後件も否定で、かつ慣用表現が多かった。それに対して、タラの場合は後件が肯定の場合や、否定でも慣用表現以外も現れる。

(b) 体言などには「+ヤナカッタラ」「+デナカッタラ」がある。「体言など+(ト)チゴタラ[違]」もありうるが、例なし。「体言など+(ト)チガウト[違]」も例なし。偶然か、「違う」の文法化が進んでいないためか。

動詞の場合(a)と異なり、二重否定形式が多く、かつその意味も慣用表現こそ少ないが、義務・必要・状況不可能が殆どである。この点はヤナイトに共通する。ソヤナカッタラ、ソーデナカッタラが大部分を占めることが関係するか。

2. 25. 6 二重否定形式の義務・必要表現の比較—ンナラン類、ナアカン・ナイカン類、ントアカン・ントイカン類、ナカッタラアカン類—

二重否定形式の義務・必要表現には、①動詞+ンナラン・動詞+ンナン類と、②動詞+ナアカン・動詞+ナイカン類、③動詞+ントアカン・動詞+ントイカン・体言+ヤナイトアカン・体言+ヤナイトイカン類、④動詞+ナンダラアカン・動詞+ナンダライカン・体言+ヤナカッタラアカン・体言+ヤナカッタライカン類の、4形式がある。

kyodanwa の用例数は、①>②>③>④の順である。

アクセント面で、①は全体1単位 or 2単位。②③④は2単位のみ。矢島(2007)が示す発生順と対応。

意味用法は、4者で相互に若干異なる。顕著な相違点は下記2点。

(1)聞き手への命令に近い意味では、②ナアカン・ナイカン類の用例が多く、③ントアカン・ントイカンに、それに類すると思われるものが若干見られる。

(2)タラ・トの節を伴い、かつ帰結が無意志動詞で「マイナスの状況に陥ることになるだろう」という意味では、①ンナランのみ可能。

但し、上記(1)(2)の場合を除き、各語形は相互に交換可能な場合が多い。

2. 25. 7 ノヤッタラ類

共通語のノナラ(矢島2006が引く、田野村1990の「実情仮定」)の意味用法を持つ、動詞・形容詞の非過去形+ノヤッタラ・ニヤッタラ・ンヤッタラ・(共通語的ンダッタラ)形について。語形面でニヤッタラがもっとも多い。

前田(1991)の枠では共通語のナラに近い:③「未実現—未実現」がもっとも用例数が多く、他に②反事実—反事実、④事実—未実現、⑤⑥一般または反復習慣がいくらか見られる。しかし、共通語のナラと異なり、kyodanwa には⑬並列・列挙、⑭後置詞的用法、⑮接続詞的用法がない。⑯⑰などは慣用化が進んだ用法なので、成立が新しいノヤッタラに見られないのだろう。

なお、⑭評価について、前田(1991)では共通語のナラの例がないが、kyodanwa のノヤッタラ類は例が見られる。これは分類基準が異なる可能性が高い。

2. 26 終助詞エ

2. 26. 1 エについて

エは標準語の「よ」「わ」にあたりとされるが、少なくとも以下の2点については、エは「わ」より「よ」に近い:①エは独言では使えない。②エは注意喚起・請け合いに用いられる。

もちろんエは「よ」と同義ではない。例えば、後述のように、kyodanwa にエナ・エナーの形が現れるが、これは共通語のヨネの用法とは異なる。

しばしば指摘されるように、男性も全然使わないわけではないが、エは女性語的である。共通語のワの一部が女性語的色彩を持つために、エが共通語のワに近いとされることがあったのかもしれない。

エの接続について、本文参照。

エの音調は、順接平坦・上昇～高接平坦・上昇。但し、意味によって、より限定される。

2. 26. 2 マッセ・ドッセ・デッセ・オッセについて

マスエ・ドスエ・デスエ・オスエと類義の、マッセ・ドッセ・デッセ・オッセという語形がある。そして、後者の方が用例数が多い。ッセの形はスエが変化したと考えるのが普通で本稿でもそれに従うが、以下の問題がある。

①エは女性語的。一方、ドッセ・デッセ・マッセ・オッセは女性語的ではない。②大阪ではエはあまり使わないようだが、マッセなどはごく下の世代を除き使う。但し、大阪落語.txt にはエが少数現れるので、上の世代では使ったか。③エのアクセントは順接のみだが、ッセのセは順接が少なく、低接の用例が多い。①②はッセが古い形を保

存、③はッセがゼ等からの類推で順接→低接に変化したと考えられる。

2. 27 終助詞ワ

2. 27. 1 ワについて

近畿方言における終助詞ワは、汎性語（男女とも使う）の用法と女性語の用法があり、音調面でも振る舞いが異なることが知られている（奥村 1962、村中 1990、服部 1991）。kyodanwa 検索では、①低接平坦は男女とも。②高接平坦は用例が少ないが、すべて女性の発話。③高接下降も用例が少ないが、すべて女性の発話。但し、②は男性も使うとする先行文献もあり、音調の精査が必要だが、その可能性を否定するものではない。

①と②の違いは、女性語的（そして、やわらかさ・丁寧さを伴うかもしれない）であるという以外にははっきりしない。ただ、②③はワの後に何も来ない場合に限られるが、①は、ワの後にナ（ー）・ネ（ー）が来得るという違いはある。一方、③は①②とは意味用法が異なり、感慨を込める、あるいは詠嘆的な場合が多いようである。

2. 27. 2 丁寧の助動詞マス+終助詞ワ→マッサ

マスワはマッサになることがある。しかし、kyodanwa 検索ではマッサは1例のみ。マッサの音調は順接平坦。

マスワがマッサになるのは、話し手の意志を表す場合のみである。音調について、マッサは順接平坦のみである（サは低接平坦にならない）。一方、マスワでワは低接平坦が多く、順接平坦もあるが少ない。

2. 28 「のだ・のです」に該当する表現

2. 28. 1 語形のまとめと変遷過程の推定

木川(2001)・松丸(1999)の記述と、対象方言の違いによる差異・問題点について述べる。

まず、当該語形の用例を列挙し、前接述語時制との関係を示すと以下ようになる：

①非過去形＝ノヤ、ニヤ、ノドス、ノンドス、ノンデス、ノス、ネ、ネー

②過去形 ＝ンヤ、 ンドス、 ンス

③両方 ＝ンデス

語形について、先行文献が報告するネン・テンについては、以前書いたとおり、上の世代の京都方言にはほぼ現れない。

非過去形と過去形とで、ほぼ相補分布をなす。例外について、③ンデスは共通語形の借用、②ンスは用例僅少で十分確立した語形かどうか不明確、なお上には掲載しなかったが「過去形+ノス」が少数例存在。

この相補分布発生の過程は以下のようなようだと考える。

①まず最初にノヤ→ンヤの変化が起こった。その際、(a)過去形+ノヤ→過去形+ンヤ、(a)' 過去形+ノドス→過去形+ンドス、(b)非過去形+ノヤ→非過去形+ンヤ、(b)' 非過去形+ノドス→非過去形+ンドス、が同時に起こるはずであった。しかるに、(b)(b)' は、非過去形の末尾がル・スのものが非常に多く、これは ル→ン・ス→ン*の交替が起こることが多かった(2.2.2)。このン・ン*の交替形で(b)(b)' の変化を起こすと、(b)ンヤ、ン*ンヤ、(b)' ンドス、ン*ンドスという、母音のない拍が2拍続く形が現れてしまう。否定形(非過去)の場合も、(b)(b)' と同じ問題が起こる。そのために非過去形(否定形も含む)では変化が阻止された。

(a)' のノスについては、kyodanwa で非過去形に付く形もあること、また過去形+ンスは用例が非常に少ないことから、変化が他のものに比べて遅れた可能性が高い。

②上の①とほぼ同時?にノエ(エは前節でのべた文末詞)→ンエの変化が起こった。この場合も、上と全く同じ理由で、過去形のみに変化がおこり、非過去形(否定形も含む)で変化が阻止された。

③取り残された、非過去形に付く語形に別の変化が起こった：ノヤ→ニヤとノエ→ネ(ー)、またノドス→ノスがそれである。

ここで、ネ(ー) はノエが変化して出来たものだと考えた。その根拠は次の二つである。

①ネ(ネー) はほぼ必ず文末に来る(倒置や、引用の助詞に続く場合を除く)点、ノエ・タンエと同じである。ニヤ・ノヤは文末以外にも多量に現れる。終助詞化の程度が異なる。

②エは必ず聞き手を必要とする終助詞だから、松丸(1999)が指摘する「ネ系」のネン(より下の世代のみ)が、聞き手を必要としない「対事的ムード」で使いにくい(話者がある)ということも説明できる。

なお、ネ(一)は、yes-no 疑問文・否定文には現れないが、疑問詞疑問文の文末には現れる。文の種類というよりも、むしろ文末という位置が問題なのかもしれない。ノエも疑問詞疑問文末に現れる。

但し、ノエとネ(一)はイントネーションが部分的に異なり、それが意味用法の違いとも連動している。疑問詞疑問文について、ノエは低接上昇調しかとれないが、ネは低接平坦調も低接上昇調も取れる。そして、低接上昇調のノエ・ネはともに聞き手への質問だが、低接平坦調は聞き手への非難・詰問の意味合いを持つ。

非過去形+ニヤ、非過去形+ノ(ヤを省略)・過去形+ン(ヤを省略)も疑問詞疑問文に使えるが、その場合は、ネと同様の音調・用法である。

なお、平叙文については、ノエ(過去形についたンエも)は低接上昇調のみ、ネ(一)は低接平坦調が原則。両者の意味は疑問詞疑問文の場合ほどには異ならない。非過去形+ニヤ、非過去形+ノヤ・過去形+ンヤも平坦調。

ノエ→ネ(一)への変化時には、エは平叙文で順接平坦が普通だったが、エがやや女性語的色彩を帯びるにつれて順接平坦・順接上昇・高接平坦に変化したのかもしれない。ネ(一)には女性語的色彩はない。

松丸(1999)は、ずっと下の世代の記述で、語形が異なる。kyodanwa にほぼなく、松丸論文にのみ現れる語形に▲を付け、語形変化を以下にまとめる。

単純な語形の置換ではなく、意味用法にもずれが生じている。非過去形+ネンとテンと、元の非過去形+ネとタンエを比べると：ネン・テンは文末だけでなくケドなどが後続しうるが、非過去形+ネ・タンエは文末のみ；ネン・テンは、非難・詰問を含まない、通常の質問の意味での疑問詞疑問文末では現れないが、ネ・タンエは現れる。また、「ドスネン」や「非過去形+ンドス」の語形は、実際少数の話者には使われるのだろうが、擬古方言形に多い。

「ノ系」

イクノヤ

→イクニヤ

→▲(共通語化。タンヤからの類推) イクンヤ

イカヘンノヤ

→イカヘンニヤ

イッタノヤ → イッタンヤ

「ネ系」

イクノエ

→イクネ

→▲(借用による置換) イクネン

イカヘンノエ

→イカヘンネ

→▲(借用による置換) イカヘンネン

イッタノエ → イッタンエ

→▲(借用による置換) イッテン

2. 28. 2 体言・形容動詞非過去形+ナンヤ・ナンデス・ナンドス

体言・形容動詞の非過去形に付く「のだ」はナンヤ・ナンデス・ナンドスとなることがあるが、この語形は共通語的。共通語的ではない形は、ヤノヤ、ドスノヤ、ヤニヤ、ドスニヤ、ヤネ、ドスネ(ネは低接)、ヤノドス、ヤノスその他がありうる。このうち、ヤノドス・ヤノスの形は少なく、1例ヤノスがあるだけ。

2. 28. 3 平叙文における、ノヤのヤの省略

「のだ」相当の、ノヤ・ンヤのヤは省略されて、ノ・ンで終わることがある。共通語の平叙文では、ノダのダを省略すると女性語的色彩を帯びる。kyodanwa でも、ヤなしは、ある程度は女性語的と言える。共通語の場合、非丁寧形に比べて、デスノ・マスノの形は一層女性語的なようだが、kyodanwa では男性にも少数だが用例があり、非丁寧形より女性的ともいえないようである。

2. 28. 4 疑問文における、ノヤのヤの省略

2. 28. 4. 1 カ後続の場合の、ノヤのヤの省略

共通語と同じく、非丁寧形「のだ」相当のノヤ・ンヤに疑問終助詞カが後続する場合、義務的にヤは省略され、ノカ・ンカとなる。この場合、言うまでもなく女性語ではない。kyodanwa では、マス形+ノヤ+カでもヤが省略さ

れる。なお、丁寧断定+疑問の、ノドスカ・ンドスカ・ノデスカ・ンデスカのドス・デスは省略されない。

ノカ・ンカについても、前接語の時制によって、ほぼ相補分布をなす。この相補分布成立の要因・世代差は、2.28.1節ノヤの場合と同じ。

2.28.4.2 カを伴わない疑問文における、ノヤのヤの省略

前接語の時制によってノ・ノンが相補分布を示すことは前節までと同じ。ヤの省略が義務的でない場合（疑問詞疑問文）は、やや女性語的か。

2.28.5 疑問文におけるカの省略

疑問詞が付く疑問文の場合、カ付きは、ほぼ、①自問型と、②「知る・分かる」などの動詞の補足節内に限られる。③質問型の疑問文にはカは、共通語の影響を受けた発話以外、皆無である。他に④反語が1例ある。なお、①自問型、②補足節内の場合、カは義務的ではなく、省略できる。

疑問詞が付かない疑問文について。質問型では、非丁寧形はカが付いたものと付かないものがあるが、丁寧形はカが必ず付く。デス・ドスで終わっても、マス・オス・ヤスで終わっても、ともにカが付く。例外は同意を求めるドッシャロ・マッシャロなどで、これにはカはつかない。自問型（原則非丁寧形）・補足節や名詞句内は、カが必須。

共通語（古めの）の場合は、疑問詞付き疑問文の丁寧形において、カが現れるのであるが、kyodanwa では、カが現れない。従って、kyodanwa は、かなしの環境が共通語より多い。疑問文における助詞カ脱落全般に、共通語より関西で早く進みつつあるかというが（井上・鎌水 2002）、関西ではもともとかなしの環境が多かったことが関係するかもしれない。

2.29 通語の「な」「ね」に訳せない終助詞のナ

助詞のナは、共通語の「ね（一）・な（一）」に訳せるもの（待遇度その他多少相違はあろう）と、訳せないものがある。後者に属する、(a)一ナの形でテ形の命令依頼・連用命令に付いて、念押し・促しを行うものと、(b)ナだけで「のだ」相当の語に付くものについて検討した。

2.30 ガナ・ヤンカ類・ヤナイカ類

2.30.1 概観

共通語の「じゃないか」の、一部の意味に類似した意味で使われる、ガナ・ヤンカ類（ヤンカ・ヤン・ヤンカイナ・ヤンカイなど）・ヤナイカ類が、kyodanwa にはすべて現れる。但しヤナイカ類は僅少。

ガナとヤンカ類を比べると、上の世代ほどガナが優勢。ヤンカ類が優勢になるのは、大正初年生まれ以降。ガナは、kyodanwa より下の世代では衰滅し、ヤンカ類専用となる。

ヤンカ類について、ヤンカ→ヤンの順に語形が発生したとされるが、kyodanwa ではヤンが多く、ヤンカの例が非常に少ない。京都市内における語形の変遷過程につき検討が必要。cf. やや類義の、同意要求のマッシャロ・ドッシャロにカは付かない（2.28.5節）。

kyodanwa に聞かれるガナ・ヤンカ類（ヤンカ・ヤン・ヤンカイナ・ヤンカイ）の音調は、ヤン「カ」一の1例を除きすべて低接平坦調。ヤンカイナ・ヤンカイもほぼ低接平坦調である。

2.30.2 ヤンカ類の用法

ヤンカ類の用法について、勝村（1991）・木川（1996）・松丸（2001）を参照して以下のように6分類した。名称は上記3論文を適宜つき混ぜた。

1. 「認識形成の要請」。2. 「認識形成の喚起」。3. 「発見」（木川「認識生成のアピール」の一部）。4. 「伝達」（聞き手が知らない情報について用いる。「のだ文」に付く）。5. 「勧誘・決意表明」（志向形に付く）。但し、この用法は使わないとする人もあること、kyodanwa にも現れないので省略。6. 「評価・意見」（木川「認識生成のアピール」の一部。話し手の個人的な評価や意見を聞き手にアピールする）

kyodanwa には1・2・3・4・6の各用法の用例が現れるが、1・2が大部分である。ヤンはヤンカとほぼ同

義で使われるが、4の上昇下降調と同じ意味では使わない人が多いか。6の用法は、共通語のジャンナイカで置き換えられる場合と置き換えられない場合があり、細分化が必要か。なお、4はジャンナイカでは置き換えられない。

用法別の音調について。内省によれば、ヤン・ヤンカとも、1～6まで全用法で低接である。そして、1356は平坦調のみ。24は平坦調または上昇調（但しヤンの上昇調は新しく、kyodanwa には現れない）、さらにヤンカには、新しい上昇下降調もある。

2.30.3 ヤンカ類+間投助詞・終助詞

ヤン・ヤンカの後にさらに間投助詞・終助詞（ナ・ナー・ネ・ネー）が続く例について。例が少数ながらあるので検討し、先行研究と比較した。

2.30.4 ガナ

ヤンカ類の6用法(2.30.2)に当てはめてガナの用法を大雑把に整理すれば1・3・4の一部・6が認められる。2は稀、4の一部・5はない。新たに、7「話し手の行動」を立てる必要がある。これは、聞き手の知らない情報を伝えているという点で4a「伝達」と似ているが、「のだ文」に付いていない点異なる。

ガナの音調は低接平坦調しかない。そしてその意味はヤンカ類の低接平坦調の場合に近い。逆に言うと、低接上昇調・低接上昇調下降調のヤンカ類とは意味が非常に異なる。

kyodanwa では、1・3・4a・6の例がみられる。1と6の用例が多い。

ガナに加えて、ガまたはナ単独の語形が現れる。ガは2例のみ。ナは2.29節。

2.30.5 ヤナイカ類

ヤナイカ類（ヤナイカ、ヤナイカイナ、ヤナイノ、ヤナイ、ヤオヘンカ、ヤオヘンノ等々）は、いくつかの意味を持つが、ヤンカ類・ガナと類義のもののみを扱う。この意味のヤナイカ類は kyodanwa には非常に少ない。該当例はわずか3例。何れも1(2.30.2節のヤンカの分類番号)の用例である。

しかし、この、ヤナイカ類の用例数の少なさ・用法の限定は、さほど古いものではない。幕末～明治前半生の話者による大阪落語 SP で、ヤナイカ・ヤオマヘンカを検索すると、1の用法がもっとも多いが、2・3・6の用法も現れる。4の確かな例（ノダ文につくもの）は見当たらない。なお、大阪落語 SP にはヤンカ類はまったく現れず、ガナの用法は、kyodanwa と特に違いがないようである。

2.30.6 ヤンカ類・ガナ類・ヤナイカ類の用法の比較

ヤンカ類・ガナ類・ヤナイカ類の用法をまとめ（本文参照）、それに基づき変遷過程を考察した：

①ガナ類とヤナイカ類が、相互に或る程度の意味の相違をもち、部分的に用法が重なりながら使われていた（大阪落語.txt の段階）。②ヤナイカ類→ヤンカ類の変化が起こった。③ガナが衰退した。それに伴い、ガナが持っていた4伝達の意味もヤンカが併せ持つようになった。④ヤンカの4伝達の用法に、上昇下降調という新イントネーションを持つ用法が発生した。この4変化のうち、②ヤナイカ類→ヤンカ類の変化については、kyodanwa でヤナイカ類もヤンカ類もともに振るわないところを見ると、「②ヤナイカ類の衰退→ガナー辺倒に近い状態→ヤンカ類の発生」といった過程のほうが正確かもしれない。

2.31 間投助詞のナ・ナーの音調

間投助詞ナーの音調について、高木(2006)は、関西の伝統方言では、「話題をもちかける」「ターンを確保する」ことを示す場合には「順接・顕著な音節内上昇調」または「高接平坦調」、同調を表明したり同意を要求したりする場合には「高接下降調」をとるとする（用語は本稿のものに置き換えた）。しかしこれはkyodanwa より下の世代に関する記述であって、kyodanwa の検索結果はかなり異なる：①文中の切れ目における、「順接・顕著な音節内上昇調」のナ・ナーの用例は存在しない。②「高接下降調」のナ・ナーが、kyodanwa より下の世代なら「順接・顕著な音節内上昇調」を取りうると思われる箇所に現れる。③「高接平坦調」のナ・ナーも若干現れるが、数が少ない。出現率の個人差も大きく、「高接下降調」との意味機能の差異ははっきりしない。やや改まった会話では、ネ・ネーが多くなるが、音調については、ナ・ナーに類似している。